新制國語讀本

新教授要目準據

卷七

3759
To10
資料室

41456
教科書文庫
4
810
41-1941
~~20000~~
~~21595~~
200030
2735

資料室
375.9
T010

昭和十六年十一月十九日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用

教科書文庫
4
810
41-1941
2000302735

新制國語讀本

卷七

新教授要目準據

學習院教授　東條操編

広島大学図書
2000302735

(第二十二號)　參　照

廣島大學圖書之印

廣島大學
教
21595
圖書

卷七目次

一 東洋の詩趣　夏目漱石　一
二 理想　阿部次郎　二一
三 折節の移りかはり　吉田兼好　一六
四 旅行論　山路愛山　三三
五 奥の細道　松尾芭蕉　二八
　一 首途　二八
　二 白河の關　三〇
　三 松島　三一

四 平泉 三二
五 象潟 三四
六 正風興隆 荻原井泉水 三六
七 閑古鳥 (諸家) 四三
八 百蟲譜 横井也有 四五
九 狂文二篇 四九
一 浮世 平賀源内 四九
二 鍾馗の畫賛 石川雅望 四九
一〇 風雅論 德冨猪一郎 五一
一一 那須の篠原 源實朝 五六
一二 落花の雪 (太平記) 五八

一三 鹽原 尾崎紅葉 六四
一四 足跡 柏馬御風 六九
一五 深い心 得能文 七一
一六 橿園文抄 中島廣足 七五
一 燕 七五
二 書 七六
三 漁村 七七
四 山家の興 七九
一七 民謠 島木赤彦 八一
一八 ゆく川の流れ 鴨長明 九〇

一九　十六夜日記抄　阿佛尼　九八
二〇　山庵雜記　北村透谷　一〇二
二一　社會と感激　中澤臨川　一〇四
二二　世界の四聖　高山樗牛　一〇八
二三　心と言葉　和辻哲郎　一二二
二四　將來の日本　鹿子木員信　一二七
二五　近世・明治の文學　一三五
一　近世　一三五
二　明治　一四九

——目次　終——

帝國大學圖書之印

夏目漱石
名は金之助。英文學者。小說家。東京市の人。大正五年歿、年五十。

新制國語讀本　卷七

一　東洋の詩趣

夏目漱石

山路を登りながらかう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、易いところへ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れ、畫が出來る。

人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向う三軒兩隣にちらくする唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの

國へ行くばかりだ。人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか寛げて、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豊にするがゆゑに尊い。住みにくい世から、住みにくい煩ひを引拔いて、有難い世界を眼のあたりに寫すのが詩である、畫である、あるひは音樂と彫刻で

山　水（夏目漱石筆）

乾坤

ある。細かにいへば、寫さないでもよい。たゞ眼のあたりに見れば、そこに詩も生れ歌も涌く。着想を紙に落さないでも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青は畫架に向つて塗抹しないでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。たゞ己が住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに、澆季溷濁の俗界を清く麗かに收め得れば足る。このゆゑに、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人生を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脱し得るの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、またこの不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利・私慾の羈絆を掃蕩し得るの點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所には屹度影がさすと悟つた。三十の今日はかう思うて居る。——喜びの深きとき憂ひ

愈〻深く、樂しみの大いなる程苦しみも大きい。之を切り放さうとすると身が持てぬ。片附けようとすれば世が立たぬ。金は大事だ。大事なものが殖えれば寢る間も心配だらう。閣僚の肩は數百萬人の足を支へて居る。背中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食はねば惜しい。少し食へば飽き足らぬ。存分食へばあとは不愉快だ。

忽ち足下で雲雀の聲がしだした。谷を見下したが、どこで鳴いてゐるのか、影も形も見えない。たゞ聲だけが明らかに聞える。せつせとせはしく、絶え間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されて、ゐたゝまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴き盡し、鳴き明し、また鳴き暮さねば氣が濟まぬと見える。その上、どこまでも昇つて行く、いつまでも昇つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違

ない。昇りつめた揚句は、流れて雲に入つて漂うてゐる中に、形は消えて無くなつて、たゞ聲だけが空の裡に殘るのかも知れない。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居處さへも忘れて正體なくなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に魂の在處が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲に現れたものの中で、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口の内で覺えたところだけ諳誦して見たが、覺えてゐるところは二三句しかなかつた。その二三句の中にこんなのがある。

前を見ては、後を見ては、物欲しと、憧るゝかなわれ。

シェレー　英國の詩人（西紀一七九二―一八二二）。

腹からの笑といへど、苦しみのそこにあるべし。

美しき極みの歌に、悲しさの極みの想ひ、籠るとぞ知れ。

なるほど、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、一心不亂に前後を忘却して我が喜びを歌ふわけにはいくまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく、「萬斛の愁ひ。」などといふ詞がある。

暫くは路が平らかで、右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸のやうな葉が遠慮なく四方へのして、眞中に黄色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣を取られて、踏みつけた後で、氣の毒なことをしたと振向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸の中に鎭座してゐる。暢氣なものだ。また考へを續ける。

詩人に憂ひはつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持に

なれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、たゞ嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、櫻も――櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、うまいものが食べられないことぐらゐだ。併し、苦しみのないのは何故だらう。たゞこの景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道を敷いて一儲する料簡も起らぬ。たゞこの景色――腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬこの景色が、景色としてだけ余の心を樂しませるから、苦勞も心配も伴はぬのだらう。自然の力はこゝに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりは、人の世につきものだ、余も三十年間それを仕通して飽きくしした。飽きくした上に芝居や小説で同じ刺激が繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞する樣なものではない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこまでも世間を出ることが出來ぬのが、彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なものも、この境を解脱することを知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じて居る。いくら詩的になつても、地面の上を駈けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

採レ菊東籬云々　晉の陶淵明の詩。飲酒二十首の一。

南山　終南山のこと。支那周代の都。豐鎬の南に在る。

獨座ニ幽篁裏一云云　唐の王維の竹里館の詩。

嬉しい事に、東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。

採レ菊東籬下。　悠然見ニ南山一。

たゞそれきりの裏に、暑苦しい世の中を、まるで忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣の人が覗いて居る譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨座ニ幽篁裏一。　彈レ琴復長嘯。
深林人不レ知。　明月來相照。

たゞ二十字の中に、優に別乾坤を建立して居る。この乾坤の功德は、「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽船・汽車・權利・義務・道德・禮儀で疲れ果てた後、總べてを忘却してぐつすりと寢込むやうな功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀にこの出世間的の詩味

王維　字は摩詰。支那唐代の詩人。上元（西紀六四〇）の初歿、年六十。

淵明　名は潛。支那宋時代の人。詩文に長ず。元嘉四年（西紀四二七）歿、年六十三。

ファウスト　獨逸の文學者ゲーテの作。劇詩。

ハムレット　英國の文學者シェークスピヤの作。戲曲。

は大切である。惜しいことに、今の詩を作る人も、詩を讀む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざ〳〵暢氣な扁舟を浮べて、この桃源に遡るものは無いやうだ。余はもとより詩人を職業にして居らないから、王維や淵明の境界を今の世に布敎して廣めようと言ふ心掛も何もない。たゞ自分には、斯う言ふ感興が演說會よりも舞踏會よりも藥になるやうに思はれる。ファウストよりもハムレットよりも有難く考へられる。斯うやつて、たゞ一人繪の具箱と三脚几とを擔いで、春の山路をのそ〳〵あるくのも、全くこれが爲である。淵明・王維の詩境を直接に自然から吸收して、少しの間でも、非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの醉興だ。

（漱石全集、第二卷）

阿部次郎　東北帝國大學教授。哲學者。山形縣の人。明治十六年生。

二　理　想

阿部次郎

當來社會の基礎は、理想主義的精神の徹底によつて始めて築かれる、私は此の事を確信して疑はない。今日の急務は、弘めるまゝに漂ひゆく精神をひきしめて理想主義の見地を確保しつゝ、自己と社會との改造を畫策することである。

甲はいふ、理想を持つ者には思ひきつた金儲が出來ないと。乙はいふ、卓越した事功を現世に擧げようとする者にとつて、理想はたゞ足手纏となるに過ぎないと。丙はいふ、理想の色は灰色である。流通して凝滯するところなき地上の享樂に、それは徒らに憂鬱の影を投げようとすると。これを口にするとせぬとに論なく、所謂經驗に富んだ世間師は大抵かういふやうな理由を腹の底に貯へて理想を忌避しようとする。しかし彼等が理想を忌避する

疚しさ

ことは、却つて反面から理想の權威と彼等の生活目的の疚しさとを證明するものといはなければならぬ。本當に公に生きることを知るものに取つては、理想は何の足手纏でもない。理想は固よりこれと矛盾するものを禁止する、これと矛盾する限り、金儲をも、現世の事功をも、地上の享樂をも禁止しようとする。そして此の禁止は吾々を苦しめる。しかし此の苦痛を甘受し、此の苦痛をさへ一つの積極的の力として、人生の一大事に立向はしめるところに、理想の理想たる所以があるのである。

或人は又曰ふであらう、人間の智慧は弱少である、吾々は千萬年の後を見きはめる力を持つてゐない。理想の力はそれが永遠性をもつことによつて始めて確乎不拔となるであらうが、永遠の理想を認識することは到底人力のよくするところではない、それよりは寧ろ、永遠のことはこれを永遠に任せ、吾々は人間らしく謙遜

ユートピヤ理想鄕。

に、現實的に、其の日〳〵を生きて行けばそれでよいではないかと。

此の思想には一理がある。若し理想主義とは理想内容の固定を條件として、吾々が懷抱する理想の觀念の進化發展を許さぬものであるならば、それは確に身の程を忘れた人間の高慢の一兆候たるに過ぎないであらう。若し又理想に從つて生活するとは、千萬年の後のユートピヤを描いて、これを目標として生活することをのみ意味するならば、吾々は明日のために今日を空しくし、其の日其の日の生活の意味を永久に他日に繰越してゆくといふ謗を免れないであらう。しかし理想に從つて生活するとは、或主義に從つて其の日〳〵の生活に内容を與へてゆくことであつて、必ずしも千萬年後のユートピヤを目標とすることを意味するのではない。此の點に論者の誤解がある。

理想の本義は、吾々の前途にユートピヤを描き出すところにあ

人格價値

るのではなくて、吾々の生活に方向を與へるところにある。凡そ方向を決定することを要するところには、それを決定すべき原理——換言すれば理想がなければならぬ。理想の實現は久遠の未來にあつても、理想の作用は吾々の一日々々にある。一日々々の生活に方向を與へ、これに永遠に參する意義を與へるものは理想でなければならぬ。愛や正義や人格價値の充實や——此等諸〻の觀念は吾々の生活に方向を與へるものとして、此の意味の理想に屬する。さうして假令愛や正義や人格價値等の概念は、其の內容に就いて社會的個人的に樣々の變容を受けることがあつても、此等の觀念其のものが理想として適用することは人類が人類として存續する限り、恐らく變ることがないであらう。人間の智慧は誠に弱少であるが、吾々が省みて自己の衷心から確實なものを摑み出す力を持つ限り、原理としての理想は、決してそんなあやふや

なものではないのである。

原理としての理想が深く人の心を衝動するに對して、現實の生活がそれと矛盾することの甚しきを意識するとき、吾々の心熱は理想の實現を夢想して、そこに憧憬の情を寄せようとする傾向を持つ。ユートピヤとしての理想はこゝに生れる。しかし此の如きユートピヤと雖も、これを求める原理が正當で、これに憧れる心熱が深刻である限り、それは心から人を動かすことによつて人類を一步理想の世界に接近せしめる。假令誤れるユートピヤにもせよ、眞摯にこれを求めようとする努力は、決して空には終らない。

彼のコロンブスの東洋に航しようとする企圖は失敗に歸したにも拘らず、彼が其の失敗の結果としてアメリカ大陸を發見したなどは、其の一例である。

コロンブス　十五世紀のイタリヤの航海家。

（人格主義）

吉田兼好
姓は卜部。文學者。歌人。正平五年(一三一〇)歿、年六十八。

物のあはれは云云
「春はたゞ花の一重に咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる。」（讀人知らず、拾遺集）

花橘は云々
「さつきまつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。」（讀人知らず、古今集）

三　折節の移りかはり

吉田兼好

一

折節の移り變るこそ物ごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ。」と人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、今ひときは心も浮き立つものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう〳〵けしきだつ程こそあれ、折しも雨風うち續きて心あわたゞしく散り過ぎぬ。青葉になり行くまで、萬づに唯心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ古の事も立ちかへり戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに藤の覺束なき樣したる、すべて思ひ捨て難き事おほし。

「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに茂り行く程こそ、世のあは

あやしき家

なまめかし

源氏物語
五十四帖。一條天皇の時（一六四—一六七）紫式部の著した小說。

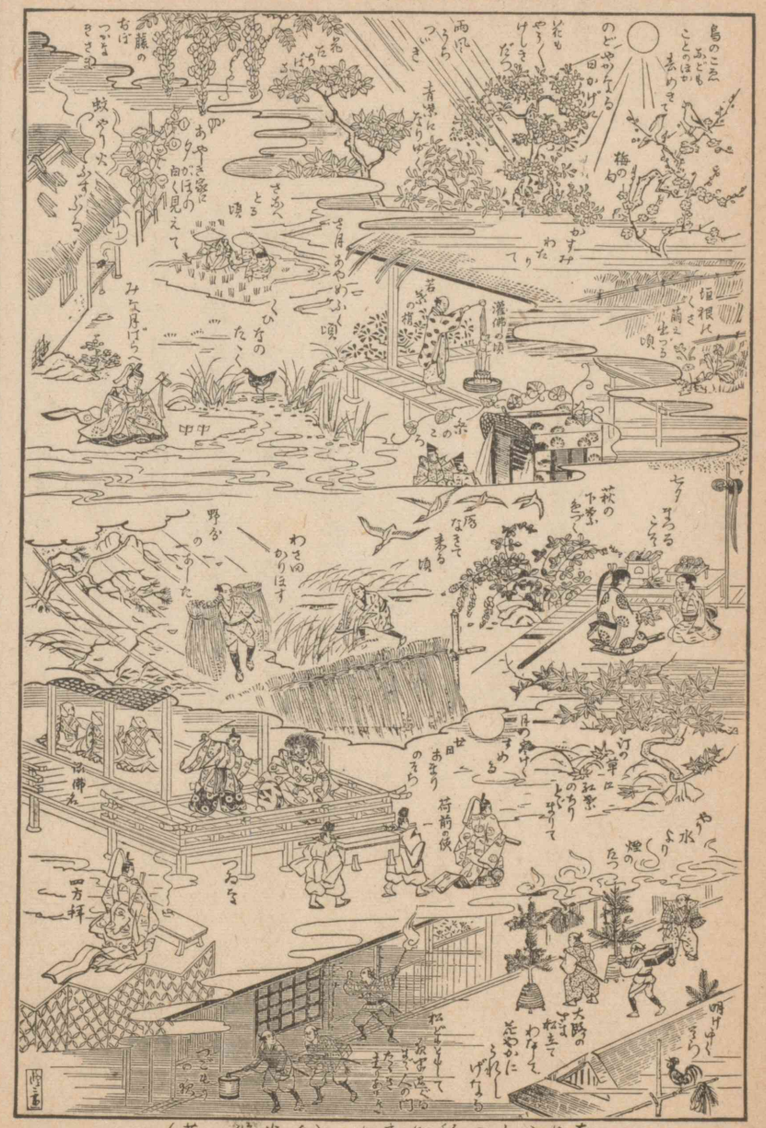
枕草子
清少納言の著した隨筆。

おぼしき事云々
「おぼしき事いはぬは、げにぞ腹ふくるゝ心地しける。」（大鏡）

れも人の戀しさもまされ。」と人の仰せられしこそ實にさるものなれ。五月、あやめ葺く頃、早苗とる頃、水雞の敲くなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顏の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓（みなづきばらへ）またをかし。

棚機まつるこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく程、早稻田刈り干すなど、とり集めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言ひ續くれば皆源氏物語、枕草子などに事ふりにたれど、同じ事また今更に言はじとにもあらず。おぼしき事言はぬは腹ふくるゝわざなれば、筆に任せつゝ、あぢき無きすさびにてかいやり捨つべき物なれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬がれの景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り止りて、霜いと白う置ける朝、遣水より煙の立つこそ



をりふしの移り変り（久米雄二筆）

御佛名
十二月十九日より廿一日まで三夜清涼殿に行ふ御佛事。

荷前の使
十二月中旬、十陵八墓に幣帛を奉る勅使。

をかしけれ。年の暮れ果てて、人ごとにいそぎあへる頃ぞ又なくあはれなる。すさまじき物にして見る人も無き月の寒けく澄める廿日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名・荷前の使たつなどぞ、あはれにやむごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて催し行はるゝ樣ぞいみじきや。追儺より四方拜に續くこそおもしろけれ。つごもりの夜いたう闇きに、松どもともして夜半すぐるまで人の門敲き走りありきて、何事にかあらむ、事々しく罵りて足を空にまどふが、曉がたより流石に音なくなりぬるこそ、年の名殘も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、この頃都には無きを、あづまの方には、なほ爲る事にて有りしこそあはれなりしか。斯くて明け行く空の景色昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして花やかに嬉しげなるこそ又あはれなれ。

たれこめて云々「たれこめて春のゆくへもしらぬ間に待ちし櫻もうつろひにけり。」（藤原因香、古今集）

二

花はさかりに月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散りすぎにければ。」とも、「さはる事ありてまからで。」なども書けるは、「花を見て。」といへるに劣れる事かは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」などはいふめる。

望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心ふかう青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間のかげ、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴・白樫などのぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしう覺ゆれ。

三

靜に思へば、よろづ過ぎにし方のこひしさのみぞせむ方なき。人靜まりて後長き夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、殘しおかじと思ふ反古などやりすつる中に、亡き人の手習ひ、繪かきすさびたる、見出でたるこそ、たゞその折の心ちすれ。この頃有る人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。手馴れし具足なども心もなくて、かはらず久しきいとかなし。

やりすつ

四旅行論

山路愛山

山路愛山　名は彌吉。評論家。東京市の人。大正六年歿、年五十四。

秋風白河の關
「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關。」
（能因法師）

跋渉

風水相擊ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものに非ず。我をして自ら進んで自然の中に住せしめよ、自然も亦旋りて我が中に住むべきなり。我動けば自然も亦動く。我の中に在る天才は、自然の光景に觸れて始めて感興を湧出す。昔は一室に坐して秋風白河の關を詠じたる人もあり、坐ながらにして名所を知れる歌人もありき。而も是自然の神髓に達すべき道にはあらず。自然は唯質問を發する者にのみ答辯を與へ、來りて見る者にのみ教訓を與ふるものなり。

試に千山萬水を跋渉し、而して後首を回して故郷を見よ。如何なる感情の此の間に生ずべきか。幼時より馴れ來れる某山某水は、始めて遙なる天に輝ける星の下の物となるに非ずや。心なく

寸碧

して飛ぶ雲も、夕日も、波濤も、人をして故郷を聯想せしむる媒介となるに非ずや。無趣味なる青空も、故郷の方の天とし云へば、大いに詩趣を生ずるに非ずや。人は自ら廻轉して、自然も亦其の態を變ず。昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり。今朝杖底の千岩は卽ち明日亦天邊の寸碧なり。甕中に在る者は甕の大小を知らず。身を轉じて甕外に在りて始めて甕の全形を知る。故郷とは何ぞや。現在の自己より過去の自己を眺むる感興なり。嘗て我は、蜻蜓を釣らんとして野外に遊びたる小兒なりき。溪流に網を投じて魚を捕へたる頑童なりき。其の岸に垂れたる楊柳、其の野に咲きたる杜鵑花、我は毫も其の奇なるを感ぜざりき。然れども我は故郷を去りて天涯の遊子となれり。位置と境遇との異れる我は、始めて過去の位置と境遇とに在りし我を客觀的に見ることを得たり。而して嘗て我を圍みて而も我に何の感興も與へざり

し自然は、始めて我をして涙を零さしむるものとなれり。是旅行が吾人に與ふる詩趣の中に於て、最も味あるものに非ずや。

舟に棹さして長き川を下れば、四山の面目畫屏の如く、時若し夏の初なれば、杜鵑花・霧島、紅の雨を降らし、時若し秋なれば、兩岸の蘆荻風に鳴る。時々刻々に變化する光景、人をして知らず覺えず自然の吸引する所たらしむ。若しくは放翁の歌へる如く、「山重水複疑無路。柳暗花明又一村。」前面に鬱々たる山あり、舵師棹を暗中に揮ふ、前途既に窮するが如し。忽ちにして山廻り天闊く、鷄犬聲あり、田畝開け、桃源一村、人をして世界の霽明を歌はしむるものあり。此の時此の情、果して如何ぞや。或は天寒くして毛氈に身を包み、柔櫓の聲に眠を催しながら、覺むるが如く眠るが如く、有るが如く無きが如き間に於て、須臾に變じ行く兩岸のパノラマを樂しむが如き、如何に沒風流の徒と雖も、終に黃金以外眞の娛樂あるこ

放翁　南宋の詩人陸游の號。此の詩は「遊山西村」と題するもの。

桃源一村　武陵桃源は假想の理想鄉。晉の陶淵明の「桃花源記」に見ゆ。

とを知るに至るべきなり。

或は又朝まだきに旅立すれば、駒の歩みに連れて茅屋の軒も動き、絲の如くなる炊煙も後へに靉き、清爽の氣身を襲ふ。殘月彼方の山の端に懸り、村里は靄の中に在りて覺めず、歩々光と暗と地歩を爭ふが如き、又微雨の蕭々たるに歴史ある古寺を訪へば、蝸牛壁に紋を畫きて、自ら多年風雨の侵蝕を示したる、若しくは夕陽に馬を下りて古英雄の廟を弔へば、何とも名狀すべからざる幽懷を生ずるが如き、これ皆旅行に非ずんば得べからざる底のものに非ずや。蕪村嘗て句あり。

羽蟻飛ぶや富士の裾野の小家より

一面の平湖鏡のごとき浮島ヶ原、其の南を縫へる松林の東海道、總べて是一幅の畫圖なり。而して春天穩やかにして「富士おろし」吹かず、空氣は漣波だも動かざる水に似たり。忽ち羽蟻の飛ぶあ

蕪村　本名は谷口寅。俳人。攝津國（大阪府）の人。天明三年（一七八三）歿、年六十八。

浮島ヶ原　靜岡縣駿東郡愛鷹山の裾野。

劉は起り　漢の劉邦、沛より起つて天下を併せた。

シーザー　羅馬の政治家。嘗て文武の大權を握つたが、後反對黨の刺殺する所となつた。

東坡　本名は蘇軾。東坡は號、字は子瞻。宋の文學者。宋の建中靖國元年（西紀一一〇一）歿、年六十。此の詩は「眞興寺閣」と題するもの。

り、靜中纔に動あり。駘蕩の春色寫し得て眞に迫る。此の如き春景、豈一室に坐して冥想する者の解し得る所ならんや。

旅行の妙趣は登臨を以て最も大なりとす。青竹を杖つきて五千尺以上の高山に上り、而して下界を見よ。數箇の山脈は蛇の如く邑を圍み洲を隔てて、營々たる人間恰も蟻垤の如く見ゆるのみならず、造化の大經濟も亦雙眸の外に漏れず、山河の配置自ら天命を示せり。乾坤大なりと雖も、悟了すれば浮動の原素に過ぎず。原子（アトム）と原子（アトム）と相擊ち相觸れ、紛糾錯綜したる混沌の狀態たるに過ぎず。劉は起りたり、項は亡びたり、シーザーは生れて死したり、帝國も覇圖も俯視すれば唯一氣のみ。東坡の所謂「山川與（ト）城郭、漠々同一形。市人與（ト）鴉鵲、浩々同一聲。」なるものは眞なり。故に山に上るは一の哲學なり、高山の絶頂に坐するものは、卽ち哲學の講壇に坐するものなり。

雲雀よりも云々　「雲雀より上にやすらふ峠かな。」（芭蕉）

山のあなた云々　「み吉野の山のあなたに宿もがな身のうき時のかくれがにせむ。」（讀人知らず、古今集）

天つ雲　源三位頼政の歌。

人は永久無限を慕ふ者なり。人の此の世に於ける境界は有限なり。然れども彼は無限の中に生れたる者なるが故に、無限は其の欲望なり。雲雀よりも高き峠にやすらひて、身を雲の中の人となし、世界の彼方より此方に旅行する鳥の行方を眺むれば、無限の渴望を慰せらるゝことなきを得ず。白雲のたなびく山のあなたにも國あり、遙なる嶺の外にも鳥の住むべき里あり。

天つ雲ひとつに見ゆる越の海の
浪をわけてもかへるかりがね

天靑くして雨は雁の背より霽れたり。自然の家には住むべき舍多きかな。人間豈塵界の爲に繩せらるべけんや。此の意義に於て、自然は人をして無限ならしむるものなり。これ旅行より學び得たる自然の敎訓にあらずや。

（愛山文集）

松尾芭蕉畫讃（富岡鐵齋筆）

松尾芭蕉　名は宗房、別號は桃青。俳人。伊賀國（三重縣）の人。元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

月日は云々　「天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客。」（李白）

去年　元祿元年（一六八八）。

江上の破屋　江戸（東京）深川の芭蕉庵。

白河の關　磐城國（福島縣）西白河郡古關村大字旗宿。

杉風　本名は鯉屋藤左衛門。芭蕉の門人。江戸の人。享保十七年（一七三二）歿、年七十八。

五奥の細道

松尾芭蕉

一首　途

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を泛べ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を住家とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思ひやまず、海濱にさすらひ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えむと、そゞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず。股引の破を綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

谷中　東京市の上野公園から西北に續く地。

千住　東京の東北口。奥州街道最初の宿驛。

草加　武藏國（埼玉縣）北足立郡奥州街道の宿。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の嶺幽に見えて、上野谷中（やなか）の花の梢、又いつかはと心ぼそし。睦まじき限りは宵より集ひて、船に乘りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思ひ、胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゝぐ。

行く春や鳥鳴き魚の眼は涙

これを矢立の初として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、うしろ影の見ゆるまではと見送るなるべし。

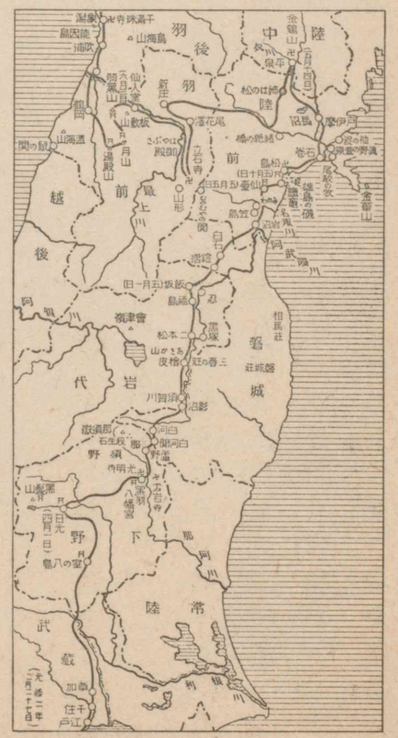
今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚たゞ假初に思ひ立ちて、吳天に白髮の恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて歸らばと定めなき頼みの末をかけ、その日漸く草加（さうか）といふ宿にたどり着きにけり。痩骨の肩にかゝれるもの先づ身を苦しむ。

身すがら

いかで都へ云々「たよりあらばいかで都へつげやらむけふ白河の關は越えぬと。」（平兼盛、拾遺集）

三關　切來の關、念珠が關、白河の關。

唯身すがらにといでたち侍るを、紙衣一衣は夜の防ぎ、浴衣・雨具・墨・筆の類、あるはさり難き餞などしたるは、さすがにうち捨て難くて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。



二　白河の關

心もとなき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へと便り求めしも理なり。中にも此の關は三關の一にして、風騷の人、心を留む。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の

古人冠を正し云云　藤原清輔の著した袋草紙に此の記事がある。

清輔　藤原清輔。二條天皇の頃の歌人。

曾良　俗稱は河合宗五郎。芭蕉の門人。旅行の同伴者。寶永六年（一七〇九）歿、年六十二。

洞庭　支那湖南省に在る大淡水湖。

西湖　支那浙江省に在る湖。

浙江　支那浙江省に在る。一名錢塘江。

梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな　曾良

三　松島

抑〻事ふりにたれど、松島は扶桑一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡して、欲つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。或は二重にかさなり、三重に疊みて、左に別れ、右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠こまやかに、枝葉汐風に吹き撓められて、屈曲自ら撓めたるが如し。千早振神の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡さむ。

雲居禪師　瑞巖寺の中興の祖。萬治二年（三三九）寂、年七十八。

平泉　陸中國（岩手縣）西磐井郡に在る。

あねはの松　陸前國（宮城縣）栗原郡に在る。

緒絶の橋　同國志田郡に在る。

石の卷　同國牡鹿郡の町に在る。

黄金花咲く　「すめろぎの御代榮えむとあづまなるみちのく山にこがね花咲く。」（萬葉集）

雄島が磯は地續にて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穗・松笠などうち煙りたる草の庵、閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懷しく、立寄る程に、月海に映りて、晝の眺めまた改りぬ。江上に歸りて宿を求むれば窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

四　平泉

十二日平泉と志し、あねはの松、緒絶の橋など聞き傳へて、人跡稀に雉兎芻蕘の往き交ふ道そこともわかず。つひに道ふみ違へて、石の卷といふ湊に出づ。「黄金花咲く。」と詠みて奉りたる金華山、海上に見渡され、數百の廻船入江に集ひ、人家地を爭ひて、竈の煙立

袖の渡り　陸前國（宮城縣）桃生郡橋浦町に在る。

尾駮の牧　同國牡鹿郡稻生村に在る。

眞野の萱原　同國牡鹿郡稻生村に在る。

長沼　同國登米郡新田村に在る。

戸伊摩　同郡登米町。

三代　藤原清衡・基衡・秀衡の三代。

秀衡　陸奥・出羽押領使基衡の子。文治三年（一八七）歿。

秀衡が跡　伽羅の御所をいふ。

金雞山　秀衡、此の山を富士に象つて築き嶺に黄金の雌雄の雞を埋めた。

高館　衣川館。義經の居館。

和泉が城　和泉三郎忠衡の

續きたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿からむとすれど、更に宿かす人もなし。漸くまどしき小家に一夜を明かして、あくれば又知らぬ道迷ひ行く。袖の渡り・尾駮の牧・眞野の萱原などよそめに見て、遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ所に一宿して平泉に到る。其の間廿餘里程とおぼゆ。

平泉

三代の榮耀一炊の中にして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を殘す。先づ高館に上れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城を繞りて、高館の下にて大

居館。
泰衡　秀衡の第二子。
國破れて云々
「國破れて山河在り、城春草木深し。」（杜甫）

象潟　羽後國（秋田縣）由利郡、鳥海山の西北麓に在る。
酒田　羽後國（山形縣）飽海郡最上川口に在る。
鳥海山　秋田・山形の兩縣に跨り、日本海岸に聳えてゐる。海拔二二三〇米。

河に落ち入る。泰衡が舊跡は衣が關を隔てて南部口を差固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠打敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢のあと

五　象潟

江山水陸の風光、數を盡して、今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、砂を踏みて、其の際十里、日影やゝ傾く頃、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隱る。闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蜑の苫屋に膝を容れて、雨の霽るゝを待つ。

其の朝天よく霽れて、朝日花やかにさし出づるほどに象潟に舟

能因島　能因法師の幽居の跡といふ。「花の上漕ぐ舟々きさがたの櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり舟。」（西行法師）
干滿珠寺　今は蚶滿寺といふ。曹洞宗の寺。
むやゝの關　羽前國（山形縣）南村山郡に在つたといふ。
西施　支那、越の美女。

をうかぶ。先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、向うの岸に舟を上れば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念を殘す。寺を干滿珠寺といふ。此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眸の中に盡きて、南に鳥海天を支へ、其の影映りて江にあり。西はむやゝの關路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙に、海北に構へて、浪打入るゝ所を汐越といふ。江の縱横一里ばかり、俤松島に通ひてまた異り。松島は笑ふが如く、象潟はうらむが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

（奥の細道）

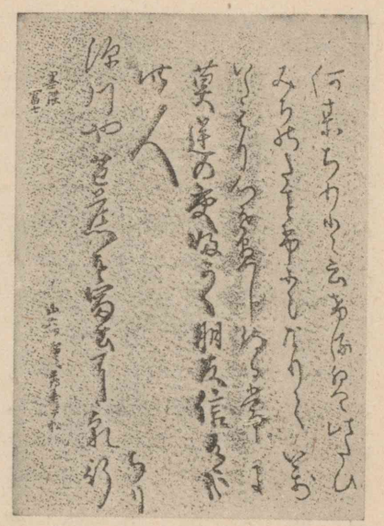
象潟古圖

六正風興隆

荻原井泉水

荻原井泉水
名は藤吉。俳人。
東京市の人。明
治十七年生。

或日芭蕉は窓に肱をかけて、物を思ふでもなく輝しい春のいきづきに耳を傾けてゐた。江戸の同人達は、花を見る爲に暇を消してゐるのか、又は師の著述の邪魔をしまいとしてか、庵を訪うて來る者が稀である事も、結局彼の心を淋しいまでに靜に澄ませたのであつた。



芭蕉眞蹟（甲子吟行）

庭の池は荒れる儘になつてゐた。それは魚の籞（いけす）として用ひてゐた頃は手入も屆いてゐたのであらうが、大火から後は全く棄て

て顧みられず、藻が浮いたり、蛙が棲んだりするのに任せきつてあつた。彼はこの毎日見慣れてゐる溜池に格別の風趣がある譯ではないが、あるが儘に物寂びた感じには飽きぬものがあると思つた。凡べて人が作つたものは如何に佳く出來てゐても、堅苦しい意力や智力が露出してゐるやうで面白くないものだが、その物が廢れて人の手から離れて「時」といふものの手に渡されてしまふと、「時」はそれをすつかり美化してしまふ。人は荒れるとか毀れるとか云つてそれを惜しむけれども、實はそれが新しかつた時、整つてゐた時よりも遙に本質的に美しくなつて來るのだ。築き上げたばかりの城よりも、草のばうくとした廢墟の方がずつと美しいやうなものだ。それは人の手に虐げられてゐた物質が、自然のままに歸る處から來るのかも知れぬ。人間の短い生命を越えて流れてゐる、悠久な時間といふものの嚴しさに觸れる爲かも知れぬ。

幽玄

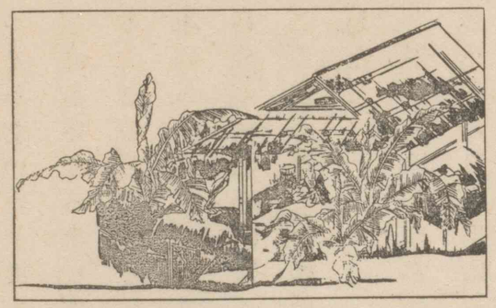
兎も角、庭先に荒れるまゝに棄てられてある古い溜池の、物寂びた水面を見つめてゐると、恐しく幽邃な感じに誘はれる。心がじつと澄み切つて、そこに漣も立てない水面その物のやうに、意識が止靜の境に凝つてしまつたやうである。その時澄み切つた心の鏡に閃いて動く一つの生命があつた。止靜した水面に音を立てて一匹の蛙が飛び込んだのだつた。大地の中から眼覺めて來た春の魂が、この輕快な生物となつて、死のやうな靜寂を蘇らせたのであつた。悠久の相に浸り切つてゐた芭蕉の心は忽ち刹那の象にひき戻された。而してその刹那の相を通じて、再び悠久の眞實をしつかりと感得する事が出來た。「蛙飛び込む水の音。」と、その時芭蕉の口に上つたのはこの短章であつた。——蛙飛び込む水の音、この音を彼は彼の心を以てしつかりと聞いた。この音を通して彼は大自然を象徴する幽玄のしたゝりを聞いたのである。この

推敲商量

音を通して彼は、宇宙の脈動する生命の寂しさを聞いたのである。この時口に上つた短章を捕捉して彼は一句を得た。

古池や蛙飛び込む水の音

「古池」の句を彼は自分ながら幾度となく吟じかへした。それは推敲商量をかさねて出來たものではなく、實に無造作に口をついて出たもので、不用意の獨りよがりに落ちて居りはしないかとも反省して見たが、この平凡なありふれた瑣細な現象の中に籠つてゐる自然の味と、その味を無造作に巧まずに率直に表現した言葉の味に自分としてはすて難い、否自分としては始めて探り得た所の新しい味、それこそ本當の俳諧の味といふべきものがあるといふ自信を



芭蕉庵（芭蕉翁繪詞傳）

冬の日　貞享元年、(一六八四)芭蕉及び門下の連俳を集めたもの。

春の日　俳諧七部集の一。貞享二年の作。

すら得たのであつた。彼は又この句を鍵として新しい世界の扉を開いたやうに思つた。今までは外部から平面的に見つぶして、つまらないたゞ事を觀じてゐた所のものが、それを內部からその生命を感ずる事に依つて、いき〳〵とした呼吸をもつて蘇つて來る。この不思議なる生命の祕密こそ、自然藝術の幽玄なる境地に求めらるべきものであると、彼は思つた。かれは今にして始めて、自分の藝術否詩歌の道の歸趨をはつきりと見極め得たと信じた。この道を以て、俳諧の新しい世界を開拓せらるべきものだと確信した。

尾張の同人は、嘗て芭蕉を迎へて始めて敎へられた時の記念として、「冬の日」を出版した後、更にこの頃、同人唱和の歌仙三卷を得たので、それに俳句を添へて第二の句集「春の日」を出したいと、芭蕉の許迄云うて來た。彼は最近の作として「古池」の句を書いて送つた。

野水　岡田氏。名古屋の人。

重五　加藤加右衞門。名古屋の人。

越人　佐分利氏。熊本の俳人。元祿十五年(一七〇二)歿。

旦藁

貞德派　松永貞德の派。貞德は德川初期に古風の俳諧を大成した。

談林派　西山宗因を祖とし、滑稽・奇拔を主とした俳諧の一派。

その集は秋になつてから上梓されたのを見ると、野水・重五等の以前からの連衆の外に、越人・旦藁等の新しい作家が多く加盟してゐた。

かうして彼は自分の培ひつゝある俳風が、到る處で詩境の眞實を愛する人々の心の中に、確な根を張つて行く事を感じてゐた。それは世間的の勢力や、人數といふ事を云ふのでなしに、藝術としての本質と、その上に獨自な新しさを持つてゐるといふ事の自信であつた。貞德派はたゞ古い趣味を繰返すだけ、俳諧らしい俳諧といふだけに止つて、生命といふものがない。談林派は新しがりに過ぎぬ。奇警と機智とで喝采を博しはするが、眞實といふものがない。是等は斷じて正しい俳諧の道を行くものではない。俳諧は一つの道である。道であるが故に人は一筋に進まねばならぬ。徒らに舊きを守つて進まぬ者も誤つてゐるし、擅に逸脫して

正風

奔放を誇つてゐる者も亦誤つて居る。貞德流も談林派も邪道である。今の俳諧としてほんたうの道を踏んでゐる者は自分達だけである。かういふ信念は、この時から芭蕉の胸の中にしつかりと据ゑられて來た。俳諧の正しい道はたつた一つある、而して一つ以上はない。その道を行く者が自分達だ、自分達の俳諧こそ「正風」と名づくべきものであると彼は考へた。而してこの考へが愈〻確に定ると共に、自分達の藝術のために、精根を盡さなければならぬといふ決心も、愈〻深く彼の心に堅められたのである。

（旅人芭蕉）

宗鑑　志那氏。近江國（滋賀縣）の人。天文廿二年（一五五三）歿、年八十九。

守武　伊勢國（三重縣）の人。天文十八年（一五四九）歿、年七十七。

貞德　京都の人。承應二年（一六五三）歿、年八十三。

宗因　肥後國（熊本縣）の人。天和二年（一六八二）歿、年七十八。

七閑古鳥

月に柄をさしたらばよき團扇かな　山崎宗鑑

落花枝に歸ると見れば胡蝶かな　荒木田守武

いつの間に夏はきぬのの衣更　松永貞德

白露や無分別なる置きどころ　西山宗因

うきわれを寂しがらせよ閑古鳥

しづかさや岩にしみいる蟬の聲　松尾芭蕉

其角　復本其角ともいふ。江戸の人。寶永四年（一三七七）歿、年四十七。

嵐雪　淡路國（兵庫縣）に生れ江戸に住む。寶永四年歿、年五十七。

丈草　尾張國（愛知縣）犬山の人。寶永元年（一三六四）歿、年四十三。

支考　美濃國（岐阜縣）の人。享保十六年（一三九一）歿、年六十七。

越人　尾張國（愛知縣）名古屋の人。

丈草　尾張國（愛知縣）犬山の人。寶永元年（一三六四）歿、年四十三。

猪も共に吹かるゝ野分かな　寶井其角

鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春　服部嵐雪

梅一輪一りんほどのあたゝかさ　内藤丈草

大原や蝶の出て舞ふおぼろ月　各務支考

そこもとは涼しさうなり峯の松　越智越人

山寺に米搗くほどの月夜かな

横井也有　名は時敏。俳人。尾張國（愛知縣）名古屋の人。天明三年（一四四三）歿、年八十二。

莊周が夢云々　「昔者莊周、夢ニ爲ル胡蝶ト。栩々然ト胡蝶也。自ラ喻適志ニ與ナルカ、不知ラレ周也。俄然覺ト、蘧々然ト周也云云。」（莊子）

古今　古今和歌集。その序文に「花に鳴く鶯、水に棲む蛙の聲きけばいきとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける云々。」

やがて死ぬ云々　「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲。」

八百蟲譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢も、このものには託しけめ。蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜に風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目をさましたれば、この物の事さらにも謗りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに啼きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大いなる手がらなれ。「やがて死ぬけしきは見えず。」と、このものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

すだく

貧の學者
晉の車胤。字は武子。家貧しく油を購ふことが出來なかつたので夏日螢を燈として學んだといふ。博學一世に鳴つた。

螢は比ぶべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇は、たゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。

横井也有

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならむ。つくつくぼふしといふ蟬は、つくし戀しといふなり。筑紫の人の旅に死にて、このものになりたりと世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蚊はにくむべき限りながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、

七賢
支那晉の竹林の七賢。
阮籍、嵇康、山濤、向秀、劉伶、王戎、阮咸。

こがね蟲

始めてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく殘りたるは、淋しきかたもあり。蚊屋釣りたる家のさま、蚊遣燒く里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。

蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲はたが爲に身を焦すや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は不物好きの謗となれり。おなじ實の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲は卑し。

蟻は明暮にいそがしく、世の營みに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。さるもたより惡しき方に穴を營みて、千丈の堤は崩さずもあらなむ。

蝸牛は家をもちたれども、行く先々を負ひあるくは水雲の安きにも似ず。蛇・蚯蚓の足なくても歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蟷螂の痩せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩みにたとふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕に乘りて、富士を眺めゆく人にぞ似たる。

促織（はたおり）・鈴蟲・轡蟲は、その音の似たるをもつて名によべり。松蟲のその木にもよらぬに、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし人にうとまる。一つ在所に、二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きりぐすのつゞりさせとは、人のために夜寒を敎へ、藻に棲む蟲はわれからと、たゞ身のうへをなげくらむを、蓑蟲の「ちゝよ。」と呼ぶは、母をば慕はで、など父をのみ慕ふらむとあやし。

（鶉衣）

原　駿河國（靜岡縣）駿東郡に在る町。

吉原　同國富士郡に在る町。

きりぐす云々　「秋風にほころびぬらし藤ばかまつゞりさせてふきりぐす鳴く。」（古今集）

藻に棲む蟲云々　「あまのかる藻にすむむしのわれからとねをこそ泣かめ世をばうらみじ。」（古歌）

平賀源内　名は國倫、號は風來山人。本草學者であつて又戲作者。讃岐國（香川縣）の人。安永八年（一七七九）歿、年五十七。

古人　宋の詩人蘇東坡。二六頁頭註參照。

石川雅望　六樹園・宿屋飯盛等と號する。江戸の人。國學者。狂歌・狂文を能くした。天保元年（一八三〇）歿、年七十八。

九　狂文二篇

一　浮世

平賀源内

古人、「春宵一刻價千金。」と高値につもれば、また浮世を三分五厘と捨て賣りにする男もあり。然れども、春宵一刻に千金出して買ふたはけもなく、三分五厘に賣りてしまふ出來合の浮世もなし。いかに口から地代の出ぬものなればとて、出るまゝのいひたい事、つまる所は、よくもあしくもいひなし次第の浮世にて、浮世の定めなきは、人の心の定めなきなり。

（六々部集）

二　鍾馗の畫賛

石川雅望

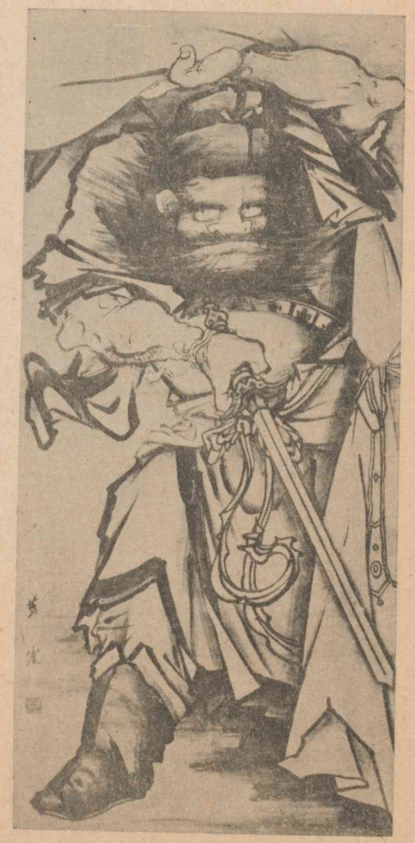
大臣と稱すれども、隨身・舍人も從へず。降魔の靈劍ありながら、

進士の垂迹

鎭座せる社も見えず。顏に手足に朱をそゝぎて、ぬき身をとつて振りまはす。もし生醉かと見てあれば、かしは餅を引窓から覗く。下戸か上戸か分くべからぬ文武兼備の進士の垂迹、げにちはやぶる紙幟、仰げばいよ〳〵軒に高し。

鬼すまぬ我が大君の國なれば鍾馗の劍のぬきがひもなし

（あづまなまり）



鍾　馗（狩野芳崖筆）

一〇　風雅論

德冨猪一郎

德冨猪一郎。號は蘇峰。思想評論家。貴族院議員。東京日日新聞社賓。熊本縣の人。文久三年（一八六三）生。

唯かりそめの旅の空に、同じ汽車の窓より彼方に聳ゆる山々の景色を眺めたるのみにても、風雅の感有る人と無き人とは、自ら其の興味を感ずる度を異にすべし。嗚呼、此の風雅の嗜みこそ、何人にもあり得べくして、又何人にもありたきものなれ。

世には風雅人とて、とかくに風雅といふことをば我が物とのみ思へる者あり。我が物と爲すは妨げずと雖も、之を我が專有物となさんとするに至りては、大いに不可なり。彼の世を避け、俗を脫して、山林に幽居し、花鳥風月をのみ友とする者、若しくは詩歌書畫、茶の湯、挿花、音樂の技藝に長じ、又は其等の鑑識に長じたるものの如き、此等はもとより世の所謂風雅人たるべき特權を有するものならん。しかも風雅の全權を專有し得べきものにはあらず。否、

風雅の嗜みは何人にもあり得べきものなり。

凡そ其の境遇の如何に關せず、其の修養の多寡に係らず、すべていかなる人といへども、其の優美の心を以て宇宙と人とに接する時は、そこにいひ難き風雅の趣味を感得することを得べし。而して風雅の嗜みは、恆に此の心を存して失ふことなからんことを努むるによりて生ず。されば、風雅は、必ずしも萬卷の書を讀み破り、天地神人を究めたる學者にのみ存するにあらず。彼の眼に一丁字なき田夫野人と雖も、田畝の間に立ちて、春霞のたなびくひまより、遠山の端の夢の如く横たはれるを見て、いひ難き快感を其の胸裏に思ひ浮べたる刹那に於ては、乃ち亦風雅の人たるなり。風雅は又必ずしも櫻かざして遊ぶ大宮人にのみ存するにあらず。彼の心なき賤の草刈といへども、其の背負へる草束の間に一朶の花を挿みて、心融々として勞苦を忘れたる瞬間に於ては、乃ち亦風雅の人たるなり。唯そこに必要なるは、此の心を恆に存して失はざらんことを努むべきと、之を錬磨修養して愈〻其の眞醇に近からしむべきとの心掛のみ。

風雅は必ずしも外物に存せず。終生身を珍畫・名器の裏に置けども、遂に風雅の眞味を解すること能はざる者あり。必ずしも又技藝に存せず。世には、詩人といはれ、畫師と呼ばれ、音樂者と稱へられて、却つて眞の俗物なる者あり。人もし風雅の嗜みあらば、其の境遇や、技藝や、もとより之を助くるに於て大なるべしと雖も、しかも、單に此等のみによりて、風雅は卽ちこゝに在りと斷言すべきものにあらず。彼の生田の森の激戰に梅花を箙に挿みて、自ら標識したる梶原景季を見よ。風雅の風雅たる、それこゝに在らん。

風雅の嗜みは人の一生をして興味多からしむ。仰いで浮雲の白きを看、俯して百花の紅なるを觀れば、吾人は頓に自己を天地の

生田の森　神戸市下山手通生田神社の境内に在る。

梶原景季　父景時と共に頼朝の臣。正治二年（一二〇〇）歿、年三十九。

懷裡に投ずる感あり。一片の明月は、何人といへどもよく之をながむることを得べく、また富者と貧者とを差別せざるなり。風雅は貴族的にもあり。しかも最も多く平民的に存す。而して吾等は此の風雅の嗜みを、平民社會に普及せしむることの、世道人心を正す上に於て最も必要なるを見る。

風雅の嗜みある者は自ら餘裕あり。かゝる人は議會討論の場中に於ても、尙よく襟に挿める薔薇の花を愛する事を解せり。風雅の嗜みある者は自ら氣品あり。何となれば、利害得失の外に心目を快暢ならしむる天地を有すればなり。風雅の嗜みある者は、いかなる場合にも樂しみあり。何となれば、現在の齷齪たる社會の裡にありて、よく宇宙と人との美を我が心に吸收することを得ればなり。風雅の嗜みある者は、又よく自ら容忍することを得。何となれば、其の暗黑なる一面を見ると共に、必ず他の光明なる一

蓮月尼
太田垣蓮月尼。名は誠。愛兒及び夫を失ひ尼となつた。和歌・俳句をよくした。京都の人。明治八年歿、年八十五。

玩物喪志

今戸燒
東京市淺草區今戸に產する陶器の稱。

面を見ればなり。蓮月尼の歌にいはく、

宿かさぬ人のつらさを情にて
おぼろ月夜の花の下ぶし

と。若しかくの如く觀じ來らば、人生何に處してか自得せざらん。

世には千金を投じて茶碗を購ひ、萬金を抛ちて書畫を求めて、風流こゝにありと誇る者あり。若し其の人にして眞に風流を解し、且力よく之を致すに餘りあらば、我等は敢て之を斥けじ。然れども其の人にして、徒らに器物の末に志を勞して、單に其の多きを貪り、其の奇を誇らんとならば、吾等は之を指して玩物喪志の徒といはんのみ。豈許すに風雅を以てすることを得んや。之に反して、廢屋破窓のうち、新聞の挿畫を壁に挿み、今戸燒の茶碗にて澁茶を喫する人と雖も、其の心よくこゝに存せば、これ實に大なる風雅なるべきにあらずや。

（第二日曜講壇）

源實朝
頼朝の第二子。鎌倉幕府第三代の將軍。承久元年(一二一九)兄頼家の子公暁の爲に殺された。年二十八。

二　那須の篠原

源　實朝

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも

大海の磯もとゞろに寄する波われてくだけて散るかも

もの言はぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ

八大龍王
八體の龍王。難陀・跋難陀・娑伽羅・和修吉・德叉迦・阿那婆達多・摩那斯・優鉢羅。

今朝見れば山も霞みてひさかたの天の原より春は來にけり

山風の櫻吹きまく音すなり吉野の瀧のいはもとゞろに

吹く風の涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋は來にけり

時により過ぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめたまへ

武士の矢並つくろふこての上に霰たばしる那須の篠原

太平記　四十卷。作者未詳。花園天皇の文保二年（一三一八）から後村上天皇の正平二十二年（一三六七）に至る凡そ五十年間の軍記物語。

俊基　藤原俊基。元弘二年（一三三二）藤原資朝等とともに殺された。

先年　後醍醐天皇正中元年（一三二四）。

土岐十郎頼貞　俊基と結んで北條氏の滅亡を謀る。美濃國（岐阜縣）の人。

七月　元弘元年（一三三一）。

落花の雪云々　「またや見む交野のみのの櫻がり花の雪散る春の曙。」（藤原俊成、新古今集）

交野　河内國（大阪府）北河内郡に在る。

一三　落花の雪

太平記

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後召捕られて、鎌倉まで下り給ひしかども、さまざまに陳じ申されし趣、げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、專ら隱謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。

再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと、思ひまうけてぞ出でられける。

落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦をきて歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも、旅寢となればものうきに、恩愛のちぎり淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行くへも知らず思ひ置

紅葉の錦云々　「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき。」（藤原公任、拾遺集）

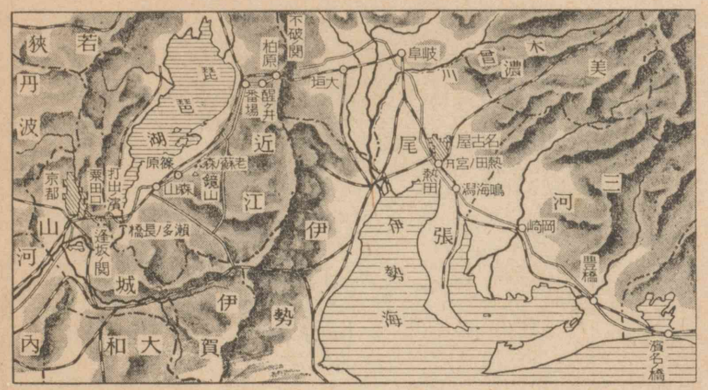
打出の濱云々　今の大津市松本、石場邊の古名。

駒もとゞろ云々　「貢物たえずそなふる東路の勢多の長橋音もとゞろに。」（平兼盛、風雅集）

うねの野に云々　「近江より朝たちくれば野にたづぞ鳴くなる明けぬこの夜は。」（大歌所御歌、古今集）

時雨も云々　「白露も時雨もいたく守山は下葉のこらず色づきにけり。」（紀貫之、古今集）

鏡の山云々　「鏡の山いざ立ちよりて見て行かむ年へぬる身は老いやしぬると。」（大伴黒主、古今集）



き、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心のうちぞあはれなる。

憂きをば留めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏みならす、勢多の長橋打渡り、行きかふ人に近江路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかとあはれなり。時雨もいたく森山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず、物を思

不破の關屋云々
「人住まぬ不破の關屋の板びさし荒れにしあとはたゞ秋の風。」（藤原良經、新古今集）

鳴海潟
「さよ千鳥聲こそ近く鳴海潟傾く月に潮やみつらむ。」（藤原季能、新古今集）

池田の宿
遠江國（靜岡縣）磐田郡、天龍川の西岸に在る。

小夜の中山
遠江國（靜岡縣）小笠郡日坂の東に在る坂嶺。

へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒をとゞめてかへりみる、故郷を雲や隔つらむ。　番場・醒ヶ井・柏原・不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋の雨の、いつか我が身の尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、潮干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に、ひく人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。　旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路

西行法師
俗名は佐藤義清。歌人、鳥羽上皇の北面の武士であつたが後出家して西行と號した。建久元年（一一九〇）歿、年七十三。

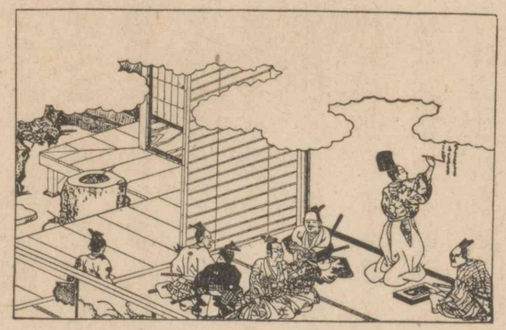
命なりけり云々
「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山。」（新古今集）

菊川
遠江國（靜岡縣）榛原郡に在る。

承久の合戰
仲恭天皇の承久三年（一二二一）。

南陽縣云々
「南陽廓縣有甘谷。谷中水甘美。上有大菊。落水從山流下。谷中人家飲此水。上壽百二三十、其中百餘歲、七八十者則爲天。」（風俗通）

を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり。」と詠じつゝ、再び越えし跡までも、うらやましくぞ思はれける。


菊川の宿

隙行く駒の足はやみ、日已に亭午に上れば、餉進らする程とて、輿を庭前に舁き止む。　轅を叩いて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎によつて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水、
今東海道菊川、
汲下流而延齡。
宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやい

とゞまさりけむ、一首の歌を詠じて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしを菊川の
おなじ流れに身をやしづめむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花ざかり、龍頭鷁首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。

島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越えゆけば、蔦・楓いと繁りて道もなし。昔業平の中將の住處を求むとて、東の方に下りしに、「夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見潟を過ぎ

龍頭鷁首の船

龜山殿　京都市右京區嵯峨今の天龍寺境内。

島田・藤枝　駿河國（靜岡縣）志太郡に在る。

岡邊の眞葛　云々「歸り來る程はなけれど朝露の岡邊の眞葛うら枯れにけり。」（藤原爲家）

夢にも人に云々「駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり。」（伊勢物語）

給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこ三穗が崎、興津・蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思ひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、潮干や淺き船浮きて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯・小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

其の日やがて南條左衞門高直請取り奉りて、諏訪左衞門に預けらる。一間なる處に蜘蛛手嚴しく結うて、押籠め奉るありさま、只地獄の罪人の十王の廳に渡されて、頸枷・手枷を入れられ、罪の輕重を糺すらむも、かくやと思ひ知られたり。

（太平記）

上なき思ひに云云　「富士の嶺の煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり。」（藤原家隆、新古今集）

七月二十六日　後醍醐天皇の元弘元年（九九一）。

尾崎紅葉
名は德太郎。小說家。東京市の人。明治三十六年歿、年三十七。

西那須野の驛
栃木縣の北部に在る、東北本線の驛。

鹽原
栃木縣北部の溫泉地。

一三　鹽　原

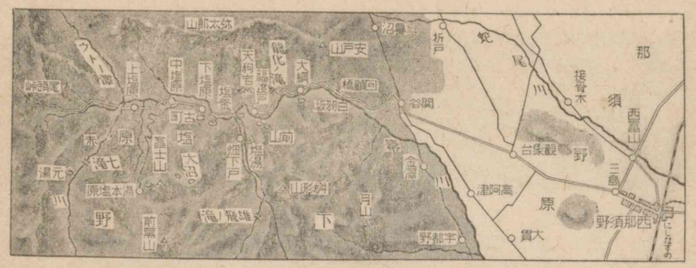
尾崎紅葉

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改れど、我は安からざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間のひとりに倦み疲れつゝ、はじめて西那須野の驛に下車せり。

直ちに西北に向ひて、今なほ茫々たる古の那須野が原に入れば、天は闊く、地は遐に、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途一帶の重巒、鹽原はそこぞと見えて行くほどに、路は窮らず。漸く千本松をすぎ、進みて關谷村に至れば、人家のつくるところに、淙々の響ありて、これにかゝれるを入勝橋となす。

橋を渡りて、僅に行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷やかに、壑深く陷りて、いくめぐりせる九折の後には、密樹聲々の鳥啼き、前には幽草歩々の花をひらき、愈〻登れば、遙に木がくれの音のみ聞えし流

この緒よりや云云
「琴の音に峯の松風かよふらし いづれの緒よりしらべそめけむ。」（齊宮女御、拾遺集）



れの水上は、淺く見えて、すはやこゝに空山の雷、白光を放ちて崩れ落ちたるかとすさまじかり。道の右は山を削りて長壁となし、谷幽に蘚碧にして、幾條ともなく白絲を亂しかけたる細瀧・小瀧の珊々として灑げるは、嶺上の松の調も定めてこの緒よりやと見すてがたし。

白羽阪を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり。これより行きて道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全逕にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯、猶數ふれば十二勝・十六名所・七不思議一々探り得べ

鹽原の奥（山元春舉筆）

くもあらず。

そもく鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峯の間を分けて深く西北に入り、綿々として箒川の流れに沂る片岨にして、いたる處巉巖の水を挾まざるなきは、宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似たり。まづ大網の湯を過ぐれば、根本山・魚止瀑・兒が淵・左靱の嶮は古りて、白雲洞は朗らかに、布瀑龍が鼻材木石・五色石・船岩など眺めて行けば、鳥居戸・前山の翠、衣に染みて福渡戸の里に入るなり。

途すがら前面の巖のところ〴〵に咲き殘りたる躑躅・山藤など打眺めつゝ行くほどに、鹽釜の湯・甘湯澤・小太郎が淵など、早くもすぎて、いつしか畑下戸の里につきぬ。

一村十二戸、溫泉は五箇所に涌きて、五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯すれば水石の粼々たるを見、仰げば西は富士・喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落ち來る流れは、二十丈の絶壁にかゝりて、素練を垂れたるごとき吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾ふかく、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるゝなど、またあるまじき別境なり。

我はこの繪を看るごとき清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき巖と激しき流れとの爲に、いく度か魂とび肉消して、理むる方なくかき亂されし胸のうちは、藹然として頓に和らぎ、恍然としてすべ

て忘れたり。

まことによくこそわれは來つれ。何ぞ來る事の甚だ遲かりし、山の麗しといふも、壤の堆きのみ、川の暢けしといふも水の逝くにすぎざるのみ、牢として拔くべからざるわが半生の痼疾は、いかでか壤と水との醫すべきものならんと、齒牙にもかけず侮りたりし己こそ、まづ侮らるべき愚かの者なれや。

見よ〳〵。木々の綠も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、そばだつ巖も、吹きくる風も、日の光も、鷄の啼く音も、空の色も、皆おのづから浮世のものならで、われはこゝに憂ひを忘れ、悲しみを忘れ、苦しみを忘れ、勞れを忘れて、かの雲と輕く、心はこの水と淡し。希くは今よりかくの如くにしてわが生を終へん哉。

（紅葉全集）

相馬御風
名は昌治。詩人。評論家。創作家。新潟縣の人。明治十六年生。

一四 足跡

相馬御風

はるかなる海の果より
初夏の雲こそ起れ。

日は正午、磯には二人
旅人は袂わかちぬ。

西ひがし、砂につけ行く
足跡はつゞきて長し。

足跡はながくつゞけど

この二人いつかは遇はむ。
一すぢの砂の足跡
それとてもやがて消ぬべし。

旅人は笠あげもちて
やゝしばしかたみに呼ばふ。
はるかなる海のはてより
初夏の雲こそ起れ。

一五 深い心

得能文

得能文 文學博士。哲學者。富山縣の人。

マーテルリンク 白耳義の文學者。哲學者。劇作家（西紀一八六二―）。

ものゝふの云々 源實朝の歌。

淺い鍋は早く沸き立つ。深い思ひは言語に現れない。深い喜びや深い悲しみには言葉が無い。言葉に現れるのは眞に深いものではない。沈默は深い印象を與へる。沈默には深い意味がある。マーテルリンクが「蜂は暗黑裏に働き、思想は沈默裏に働き、德は祕密裏に働く。」といつたのは面白い語である。詩歌などに於ても徒らに嬉しいと又は悲しいといふよりも、却つてこれを露骨にいひ現さないところに無限の情趣が味はれる。例へば壯烈である、跌宕であると感歎の語を發するよりも、「ものゝふの矢並つくろふ籠手のうへに霰たばしる那須の篠原。」といつた方が遙に壯大である。それと同じく、悲しいといはぬ處に眞に深い悲しみがあり、嬉しいといはぬ處に眞に深い喜びがある。われらがソクラ

晦澁
佶屈

テースや基督の運命に對して無限の感慨をいだくのはこのためである。

我等が深い心の奥底には、常に動いて止まぬものがある。この活動が鈍り、若しくは停る時に我等は語を發する。しかもこの活動の眞相をその儘に發露することは困難である。されば、獨創的な深奥な思想家の書を讀む時は、常に晦澁・佶屈を感ずる。このやうな思想家は出來るかぎりおのれの思想を現し、これを傳へようとするのであるが、無限の活動はこれを捕捉することが容易でない。それで種々樣々にこれをいひ現さうと苦心する。そして讀者はその言葉を辿つてその思想を得ようとするのであるから、その眞實相に達することが困難なのである。既にいひ現さるれば動かなくなる。このいひ現された動かないものを再び整頓し、改めて排列すれば、平易明瞭ならしめることが出來る。これが卽ち

獨創的思索家の書よりも、その紹述者の書が比較的に解し易い所以である。これは深遠な思想の事のみではなく、我等の日常生活に於ても亦さうである。表面に現れた多くのことは、あり觸れたことで何の奇もないやうであるが、然しその奥底にはいひ現しがたい深い活動があるのである。

奥の奥にある最も深いものは普通の意識ではなく、意識の奥底にあるものである。これが人格の核である、眞の我である。我等が深く思ひに沈む時は、眞の我が自らを見ようとするのである。我が我を見ようとする時には何の語もない。水中に魚鼈が跳れば水面に泡が浮ぶ。この泡が語である。そして跳るところが深いと泡は立たない。跳るところが水面に近ければ近い程、ますます多く泡が立つ。語の多いのは活動が淺い處に行はれる證據である。そして跳躍の形狀によつて、泡の形狀に種類があると同じ

純粋思惟

ルーテル　獨逸の人。宗教改革を唱へた人(西紀一四八三―一五四六)。

く活動の樣式によつて、語がそれに應じて現れる。語はその人を表す。かくて生きた沈默は我等が深く自らの内に沈潛するのである。深く自らの内に沈んで自らを見る時に、我は具體的の全體に現れる。具體的のものは語で表されない。具體的の全體は活きて居る不斷の活動である、自由である。この活動は自らに法則を賦與する。それが理論的に働けば純粋思惟であり、實踐的に働けば實踐理性である。前者には學の基礎が立てられ、後者には道德の基礎が立てられる。自己が自己に與へた法則に從つて働けば善であり、働かなければ惡である。惡は消極的であり、働かないことであり、意志しないことであり、非有である。從つて善惡は事の成果に在るのではなく、ルーテルのいつたやうに「善事は善人を作らず、善人が善事をつくる。」のである。そして我が深く自ら省みて法則にそむいたと感ずる時に悔恨が起る。悔恨から罪の意

法悅

中島廣足　檀園又は田翁と號した。國學者。肥後國(熊本縣)の人。文久四年(一八六四)歿、年七十三。

識が起る。然し深く沈潛しないときはこの意識は起らない。されば沈潛することの淺い人には罪の意識は無い。從つて自ら辯護しようと試みる。こゝに於て語が多い。やがては不平を訴へる。自分ほど不幸なものは無いともいふ。眞實に切實に不幸を感ずるのは深く自ら省みた時である。即ち深い奥底が動いて居るのである。動いて居る時は語は無い。痛切な深い悲哀も、大歡喜の法悅も、共に語はない。しかも大地は震動する。

（淺人零語）

一六　檀園文抄

中島廣足

一　燕

いとうらゝかなる日、思ふどちうちつれゆく大路に、つばくらめ

ひぢ

のこなたかなた飛びかひて、ふと袖の下を過ぎたる、手にも捕へつべくていとをかし。雨のなごりのなほかわかぬ方などに下りゐて、ひぢを含みつゝ、童部の走りくるに驚き立ちて、遠く翔りゆくもをかし。梁に巣くひていつの程にかあまたの雛おほしたるが、飛びくる親を待ちて、口のかぎり開きつゝ鳴きさわぎたるさまこそ、いみじうあはれなれ。

道々しき筋何くれ

えうある事

二 書

夏の日の暮難きをも知らず、冬の夜の長きをも覺えぬは、ふみ見る心の樂しさになむありける。さるは道々しき筋のはさらなり、家々にしるせる何くれのふみ、またかりそめの筆すさびなど、唐やまと、いにしへ今と、いとさまぐ多かる中に、わがたてたる筋ならぬも、見もてゆくまゝには、えうある事どもありて、かにかくに飽かず面白く樂しきは、ふみにしく物またなかりけり。遠き世のを見る程は、われもその世にある心地して、やがてその人々を友となしてうち語らふ心地さへせらるゝを、われも筆とりて、よしなし事ども書きつくるが、たまく散りぼひ殘りて後の世に傳はらば、今のいにしへを見るが如く、後の人はたわれを友とせむには、千歳の末にさへ知る人ある心地して、いとをかしくなむ覺ゆる。よろづの心やるわざいとさはなれど、たゞひとりゐて飽かず樂しきは、ふみの外にまた何かはあらむ。「あるが上にもあらまほしきはふみなりけり。」と、鈴屋の翁の言はれたるは、げにさる事にこそ。

散りぼひ

たよりなし

三 漁村

あまのすみかばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき海邊の、風もたまらぬ松かげなどに、たゞかりそめに作りたる藁屋

はかなげ
ものから
手がらみ
まぼり
さち多し
のゝしる
くゞつ

どものさま、浪うち寄せなば、やがて流れも失せぬべう、いとはかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なか〳〵にをかしきものから、さて住まひなば何心地かせましと、思ひやるだに心ぼそし。夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが磯邊に立ちて、「けふはいと遲くもあるかな。」などいひつゝ、沖の方をまぼりをり。うまごどもにやあらん、まさごの上を走りありきつゝ遊びゐたるに、入日さしたる島かげより、三つ二つ歸りくる舟の、かぢひき折りてほこらしげなるを、老人待ちえ顏にうちほゝゑみたるは、さち多かりしにやと見ゆ。渚に寄せて飛びおるゝまゝに綱くりよせなど、とかくしつゝのゝしるに、男も女もあまた出で來て、大きなる籠に魚ども取入れつゝ、になひもて行くさま、さはいへど賑ははしげなり。くゞつめくものもて來て、ちひさき魚三つ四つ乞ひもて行く童などもあり。すべて人多く立ちこみさわぎて、舟のあたりか

あまのさへづり
くさはひ

しがましく、さし寄りてのぞくべうもあらず。いと長き綱の、渚にかけ干したるを、くりためて取入れなど、やう〳〵しづまりゆけば、こなたかなた火ともしたるすき影、壁もあらはにて、いとあはれに見ゆ。ひと夜宿りてみれば、波風の響枕をゆすりて、つゆまどろまれず。曉方、隣の家々目さまして、なりはひのことどもなるべし、あやしう聞知らぬことどもを、おのがじし聲高にいひかはしたるげにあまのさへづり、めづらしうも、をかしうも。

四　山家の興

山里のすまひは寂しきやうなれど、さるかたになれぬれば、なかなかにをかしうなむ。さるは花もみぢの色香はさらなり、鳥蟲の聲につけても、おのづから心を慰むるくさはひおほく、松のはしら、竹のあみ戸、小柴がきゆひめぐらしなど、よろづのてうどさへいた

事そぐ

あるじまうけ
たかうな
かむ

そこはかとなく

住まで云々
「山深くさこそ心はかよふとも住まであければしらむものかは。」（西行法師、新古今集）

う事そぎて、庭などもたゞおのづからなるいはほのたゝずまひ、軒近くしたゝる水をふる木のうつぼめく物にうけためたる、飯炊ぐにも、手洗ふにも、唯この水にて事足りぬ。まれ〳〵問ひくる人、はたあるじまうけなどいふ事もせず、わらび・つくぐし・たかうな・ところなどの、をりにしたがひ所につけたるものして、手づからかめる白酒すゝめなどす。おなじき物語も人聞きはゞかるべき事しなければ、心にのこす隈もなくて、ゐひすゝみぬれば、やがてうち連れつゝ、唯さながらなるうちとけ姿にて、そこはかとなくあくがれあるきなどするも、「住まであはれは」とか言ひけむやうに、またなく心ゆきて、いのちも延ぶるやうになむ。

一七　民　謠

島木赤彦

島木赤彦
本名は久保田俊彦。歌人。長野縣の人。大正十五年歿、年五十一。

萬葉集
二十卷。撰定年代及び撰者未詳。我が國最初の歌集。仁德天皇の頃から淳仁天皇の御宇に至るまで、約百三十年間の和歌が收められてゐる。

古今集
正しくは古今和歌集。二十卷。醍醐天皇の勅により紀貫之等延喜五年（一九五）に撰んだ歌集。

日本民族には、太古から日常の感情を歌謠にうつして、自ら口に歌ひ、且又對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謠の中で、或特別な形式を備へたものは、移つて短歌となつて、かの萬葉集時代に於ける大發達をなした。然るに、この萬葉集時代に緊張の頂點まで達した短歌が、古今集以後の勅撰に至つて、著しく弛緩の情態を現したといふことは、一面奇異な現象のやうに考へられるが、それは決して奇異ではないのである。

古今集以後の和歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生み出された歌ではない。民衆とかけ離れた一部貴族社會の玩弄物であつて、その出來方も、緊張した感情から生み出されると言ふよりも、外形を整へるに苦心して作り出されたもの

で、內面の空疎と萎縮とは、當時の歌人の思はぬところであつた。故に私は、萬葉集の精神は決して勅撰集には傳はらずに、却つて短歌の形を存してゐないその當時の民謠に存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生れた短歌の精神が、民族的歌謠の一分流であるところの民謠に合流してゐることは、決して不自然ではない。

このことは、勅撰集時代の、その背後に存してゐたと思はれる神樂歌や催馬樂歌の中に現れてゐる民謠を檢べて見れば、容易にうなづくことが出來るのである。

笹分けば袖こそ破れめ、利根川の石は踏むともいざ河原より。

しながどり猪名の湊に入る舟の、かぢよくまかせ舟かたぶくな、若草の妹も乘せたり我も乘りたり。

といふやうなのは、ほんの一例に過ぎぬが、この民謠から採つたと

勅撰集時代　醍醐天皇の時勅して古今和歌集を撰せしめられた時から、後花園天皇の時新續古今集を撰せしめられた時まで、五百三十餘年間をいふ。

神樂歌　神樂に合せて歌ふ歌。

催馬樂　雅樂の一種。

思はれる神樂歌や催馬樂歌を以て、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。さうして、この民謠の系統は、足利・德川の各時代を經て、順次に發達推移して今日に及んでゐるのである。

然らば、それ等の民謠の生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に產み出したところの、惻惻として人の心を動かす力を持つ情調である。農民の唄ふ歌謠には、のん氣に似て、その底には重々しい調子がこもつてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊のやるせない哀音がこもつてゐる。

乳が崎沖まで見送りましよが、それから先は神だのみ。（伊豆大島）

の唄の如き、必ずしも船頭とばかりは言へぬが、海中の孤島に賴りなく住む人々の心理が、「神だのみ」の哀音となつて現れてゐる純粹

乳が崎　大島の西北端。

淺間　長野縣と群馬縣との境に跨る活火山。海拔二五四二米。

追分　長野縣北佐久郡に在る町。もと中仙道と善光寺道との分岐點であつた。

碓氷峠　淺間山の南、群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡との境に在る。海拔約一〇〇〇米。

坂本　群馬縣碓氷郡に在る町。碓氷峠の東麓。

さを味はふべきである。

淺間の煙が北へと靡く、今宵泊らにや雨になる。

一誦して、淺間の山裾から碓氷越をして、北國街道を往來する馬子の唄であることがわかるではないか。淺間の裾野には追分の宿場があり、碓氷峠の下には坂本の宿驛があつて、いづれも中仙道の旅人の一夜の泊場であつた。そこの宿引の女が、旅人を呼びとめて、一宿を勸める心がこの唄の心である。一夜の宿を勸める歌謠を、勸められる旅人や馬子が自ら唄つて、自分

淺間山

中仙道　東山道を經て江戸から京都へ行く街道。

輕井澤　長野縣北佐久郡東長倉村。避暑地として名高い。

人麿　柿本人麿。歌人。持統・文武の兩朝に仕へた。傳未詳。

貫之　紀貫之。平安朝の歌人。古今集撰者の一人。天慶九年（一九六）歿、年六十五（一説）。

の境遇を辛うじて慰めてゐるところが、哀れな漂泊の心である。

年が年中、馬の鈴を鳴らして、上るは碓氷の坂、下るは輕井澤、追分の曠野である。見上げる空には、いつも淺間の煙が靡いてゐる。煙は高く南へ靡く。風が北になれば日は晴れる。煙が北へ靡けば、あすの日和は雨となる。「今宵泊らにや雨になる。」は、この嶮坂を上下する脚絆・草鞋の身には、決して戯れの問題ではないのである。

麥ついて夜麥ついてお手にまめが九つ、九つのまめを見ればば親里がこひしや。

麥をつくのは農家の新婦である。嫁入して幾ばくならず、家人の心も知り難く、起臥にいとゞ落着かぬ心がある。父母の愛娘として、掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥をついて掌に出來たまめを眺めて、親里を思ふ痛切さは、恐らく人麿・貫之の秀歌にも優るものがあらう。

これ等の唄は、その生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が抒べられてゐる。さうして、民謠としての生命も、全くその中にあるのである。

かゝる職業的個性の心理や感情を表す民謠ほど、それがまた地方的の個性を表現してゐると言ひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くも土の個性を離れることは出來ない。その土地の持つ情調が、その土に住む生活から唄はれた民謠に、強い影を投ずることは、誠に自然の現象である。「乳が崎沖まで」の唄が島に生れ、「淺間の煙」の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生れ、「麥ついて」の唄が伊豆南方の田舍に生れてゐる事を考へ合せると、民謠と地方との關係を、ほゞ推測することが出來よう。たゞ、民謠の優れたものは、それが口うつしに他の地方に傳はり易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發

稲生澤村
靜岡縣賀茂郡下田町の近傍。

生したかを見分け難いことも少くない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れては行かれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れて來る。例へば、「麥ついて」の歌は甲斐の南方では、

大麥ついて麥ついて、お手にまめを九つ、九つのまめを見れば、親の在所こひしよ。

と、唄つてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味はれる。

この苗をとりあげて、どこに棲まずや、いなごや、きりすゝきすき葦のこやのうらに棲まずや。

これは、伊豆の南方の稲生澤村の苗取唄である。思ふに、この歌謠は、決して近代のものではない。少くとも平安朝時代か、或はそれ以前に生れたものが、その優れた秀でた調子を持つが爲に、南方

の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち滿ちてゐる。この美しい心情を持つた民謠が、今日の日本に殘つてゐて、現在農夫の口に唄はれてゐることは、民族の誇とするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。刈つたすすきや、結きあんだ葦の小屋の中に、自分とともに住まないか。」といふその心は、なんといふ單純な、同情の籠つた、愛に滿ちた心であらう。

自然の中に愛に包まれて、その日の勞働をいそしみながらも、一匹の蟲にも親しい心を持つ農夫の生活が、涙ぐましいまでに尊い。「この苗を取りあげて。」は、原作は勿論「この稻を刈りあげて。」であつて、それが苗取唄に轉用されたものと思はれる。この唄は他の地方にも殘つてゐるが、唄の體から考へて、伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し二の坂越して三の坂越しや强清水。

これは信濃國の民謠中、出色の一つである。草刈馬に乘つて、八ヶ嶽の裾野を上る。一の坂がある、二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たくしみ入るほどの强清水が湧いてゐるといふ意で、草刈の男女に唄はれることによつて、この唄の趣が深い。さうして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖かいが、山國の明るさは寒い。それが、これ等民謠の中にも現れてゐるのである。

八ヶ嶽　長野縣と山梨縣との境に在る山。海拔約二八九九米。

鴨長明
鎌倉時代の歌人。文學者。京都の人。建保四年(一八六)歿、年六十四。

一八　ゆく川の流れ

鴨　長明

一

ゆく川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、且消え、且結びて、久しくとゞまる事なし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。

玉敷の都のうちに棟を並べいらかを爭へる、たかきいやしき人のすまひは、代々を經てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は作り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も變らず人も多かれど、古へ見し人は、二三十人がうちに僅に一人二人なり。あしたに死にゆふべに生るゝならひ、唯水の泡にぞ似たりける。

知らず、生れ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。また

安元三年
第八十代高倉天皇の御代(一八三七)。

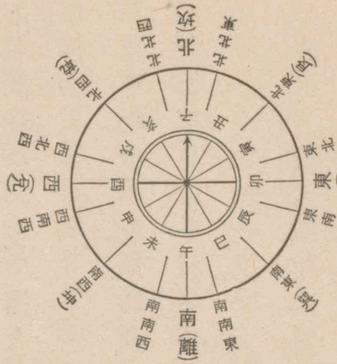
知らず、假のやどり誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を喜ばしむる。そのあるじと住家と無常を爭ひ去る樣、言はば朝顏の露に異らず。あるは露落ちて花殘れり。殘ると雖も朝日に枯れぬ。あるは花は凋みて露なほ消えず。消えずと雖もゆふべを待つ事なし。

凡そ物の心を知れりしよりこの方、四十餘りの春秋を送れる間に、世の不思議を見る事、稍〻たび〳〵になりぬ。

二

去にし安元三年四月二十八日かとよ。風烈しく吹きて、靜ならざりし夜、戌の時ばかり都の巽より火出で來て、乾に至る。果には朱雀門・大極殿・大學寮・民部省まで移りて、一夜が程に塵灰となりにき。火元は樋口富の小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けるとなむ。吹き迷ふ風にとかく移り行く程に、扇を廣げたるが如

く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹き立てたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず吹き切られたる焔、飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人、現心あらむや。あるは煙に咽びて倒れ伏し、あるは焔にまぐれて忽ちに死ぬ。あるはまた纔に身一つからくして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍萬寶さながら灰燼となりにき。そのつひえいくそばくぞ。このたび公卿の家十六燒けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛のたぐひ邊際を知らず。人の營み皆おろかなるなかに、さ



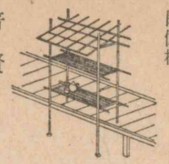
しも危き京中の家を作るとて、寶を費し心を惱ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

三

こゝに六十の露消え方に及び、更に末葉の宿りを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿りを作り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々に傾き、住家はをり〳〵に狹し。その家の有樣、世の常にも似ず。廣さは僅に方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるがゆゑに、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて繼目ごとにかけがねをかけたり。もし心に適はぬことあらば、易く外へ移さむが爲なり。その改め造る時、いくばくの煩ひかある。積むところ、僅に二輛なり。車の力を報ゆる外には、更に他の用途いらず。

日野山　今京都市伏見區木幡山の東北に在る。

閼伽棚



普賢　釋迦如來に侍してその教を輔ける菩薩。

不動　不動明王、又は不動尊といふ五大明王の一、大日如來の化身。

往生要集　三卷。惠心僧都（源信）の著。淨土往生の要文を集め、念佛歸依をすゝめたもの。

今、日野山の奥に跡を隱して後、南に假の日がくしをさしいだして、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚をつくり、中には西の垣に添へて、阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に、普賢並に不動の像を掛けたり。北の障子の上に、小さき棚を構へて、黑き皮籠三四合を置く。即ち和歌・管絃・往生要集如きの抄物を入れたり。傍らに箏・琵琶各〻一張を立つ。いはゆる折箏・繼琵琶これなり。

東に沿へて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の壁に窓を開けて、こゝに文机を出せり。枕の方に炭櫃あり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地を占め、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろ〳〵の藥草を植ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。

その處のさまをいはば、南に筧あり。岩を疊みて水をためたり。

正木のかづら

跡の白波　「世の中を何にたとへむ朝ぼらけこぎ行く舟のあとの白波」（滿誓沙彌、拾遺集）

岡の屋　山城國（京都府）紀伊郡宇治川の東岸に在る。

滿沙彌　滿誓沙彌。俗名は笠麻呂。奈良朝、元正帝の時代の人。

潯陽の江　白樂天の琵琶行脚の古蹟。支那江西省九江府德化縣に在る。

源都督　桂大納言源經信。琵琶の名手。承德元年（一〇九九）、年八十二。

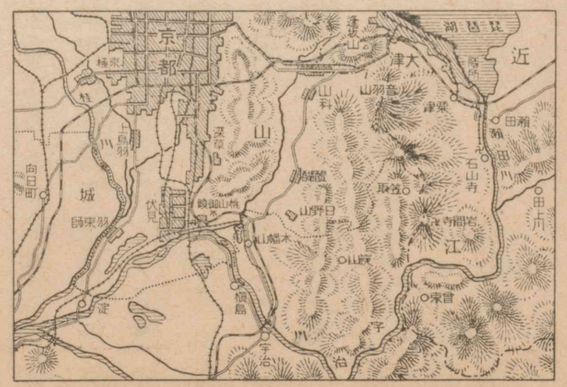
秋風の樂　琵琶の曲。盤涉

林、軒近ければ爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡を埋めり。谷茂けれど西は晴れたり、觀念の便りなきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西方ににほふ。夏は杜鵑を聞く。かたらふごとに死出の山路を契る。秋は蜩の聲耳に滿てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む積り消ゆる樣罪障に譬へつべし。もし念佛もの憂く、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに妨ぐる人もなく、又恥づべき友も無し。ことさらに無言をせざれども、一人居れば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らむ。若し跡の白波にこの身を寄するあしたには、岡の屋に往き交ふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、若し桂の風、葉を鳴らす夕には、潯陽の江を思ひやりて、源都督のながれをならふ。もしあまりの興あれば、しば〳〵松の響に秋風の樂をたぐ

調の曲名。流泉の曲琵琶の祕曲の一。

へ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばしめむとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じてみづから心を養ふばかりなり。

おほかたこの處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今既に五とせを經たり。假の庵もやゝふる屋と爲りて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづからことの便りに都のさまを聞けば、この山に籠りゐて後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。度々の炎上に亡びたる家、またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみのどけくしてお



それなし。程せばしといへども、夜臥す床あり。晝居る座あり。一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。雎鳩は荒磯に居る。卽ち人を恐るゝが故なり。我またかくの如し。身を知り世を知れれば、願はず、交らはず、たゞ靜なるを望とし、愁ひなきを樂しみとす。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬・七珍もよしなく、宮殿・樓閣も望なし。今さびしきすまひ、一間の庵、自らこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれる事を恥づといへども、かへりてこゝに居る時は、他の俗塵に着することを憐む。若し人このいへることを疑はば、魚と鳥とのありさまを見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まずして誰か悟らむ。

（方丈記）

阿佛尼
藤原爲家の妻。歌人。鎌倉時代の人。歿年未詳。
十六夜日記
阿佛尼の京都から鎌倉へ下った時の日記。
壁の中より云々
古文孝經をさす。

一九　十六夜日記抄

阿佛尼

昔壁の中よりもとめ出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな。みづぐきの岡のくず葉、かへすがへすも書き置くあとたしかなれどもかひなきものは親のいさめなり。また、賢王の人をすてたまはぬまつりごとにもれ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるゝものは、かずならぬ身ひとつなりけりと、思ひ知りながら、又さてしもあらで、なほこのうれへこそ、やるかたなく悲しけれ。

更に思ひつゞくればやまと歌の道は、たゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと、思ふ人もやあらむ。ひのもとの國に、あまの岩戸ひらけし時、よもの神たちの神樂のことばをはじめて、世を治め物をやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ、この道のひじりたちは記しおかれたりける。

二度勅をうけて
定家撰新古今集、新勅撰集。
爲家撰續後撰集、續古今集。
二人の男の兒
爲相、爲守。
細川
播磨國（兵庫縣）細川の庄。

子を思ふ云々
「人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな。」（藤原兼輔、後撰集）

さても又、集を撰ぶ人はためしおほかれど、二度勅をうけて代々に聞えあげたるは、たぐひなほありがたくやありけむ。そのあとにしも、たづさはりて、二人の男の兒ども、もゝちの歌のふる反故どもを、いかなる緣（えにし）かありけむ、預りもたることあれど、道を助けよ、子をはぐくめ、後の世をとへとて、深きちぎりをむすびおかれし細川のながれも、故なく、せきとめられしかば、あととふのりのともし火も、道を守り、家をたすけむ親子のいのちも、もろともにきえをあらそふ年月を經て、危く心細きものから、何として、つれなくけふまではながらふらむ。

惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心のやみはなほしのびがたく、道をかへりみるうらみは、やらむかたなく、さてもなほ、あづまのかめの鏡にうつさば、くもらぬかげもやあら

はるゝと、せめておもひあまりて、よろづの憚りをわすれ、身を益なきものになしはてて、ゆくりもなくいさよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。

頃はみ冬たつはじめのさだめなき空なれば、降りみ降らずみ時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつゝ、事に觸れて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとてとゞまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。

目かれせざりつるほどだに、あれまさりつる庭も籬も、ましてと見まはされて、したはしげなる人々の袖のしづくも、なぐさめかねたる中にも、侍從・大夫などのあながちに打屈したるさまいとこゝろぐるしければ、さま〴〵いひこしらへつ。

代々に書きおかれける歌の草子どものおくがきして、あだならぬかぎりをえりしたゝめて、侍從の方へ送るとて、書き添へたる歌、

人やりならぬ云云
「人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ歸りこむ。」（源實、古今集）

侍從爲相。
大夫爲守。

和歌の浦にかきとゞめたる藻鹽草
　これを昔のかたみとも見よ
あなかしこ横波かくな濱千鳥
　ひとかたならぬ跡を思はば

これを見て侍從のかへりごといと疾く有り。

遂によもあだにはならじ藻鹽草
　かたみを三代の跡に殘せば
迷はまし教へざりせば濱千鳥
　ひとかたならぬ跡をそれとも

このかへりごといとおとなしければ、心やすくあはれなるにも、昔の人に聞かせたてまつりたくて、又うちしほたれぬ。

（十六夜日記）

北村透谷
名は門太郎。創作家。評論家。詩人。神奈川縣の人。明治二十七年歿、年二十七。

卓犖不羈

寤寐の間
意無意の際

幽趣

二〇 山庵雜記

北村透谷

人間の心中に大文章あり、筆を把り机に對する時に於てよりも、默居冥坐する時に於て、燦爛たる光明を發する事多し。心中の文章より心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中の文章を裝はんとするは、文字の賊なるべし。古より卓犖不羈の士、往々にして文章を事とするを喜ばず、文字の賊とならんよりも心中の文章に甘んじたればならん。

早曉臥床を出でて、心は寤寐の間に醒め、おもひは意無意の際にある時、一鳥の聲を聽けば、忽として我天涯に遊び、忽として我塵界に落つるの感あり。我に返りて後、其の聲を味はへば、凡常の野雀のみ。然るに我が得たる幽趣は、地に就けるものならず。こゝに於て私に思ふ、感應我を主として他を主とせざるを。

バイロン
イギリスの詩人（西紀一七八八―一八二四）。

頃者

駁擊

是非曲直

世にあり難き至實は涙なるべし。涙なくては情もなかるらん。涙なくては誠もなかるらん。狂ひに狂ひしバイロンにとりては、涙は細繩程の役にも立たざりしなるべけれど、世間おほかたのものを繫ぎ止むるは、此の實なるべし。人世涙あるは原頭に水あるが如し。世間若し涙を神聖に守るの技に長けたる人を擧げて、主宰とすることあらば、痛く悲しきことは跡を絕つに庶幾からんか。

他を議せんとする時、尤も多く己の非を悟る。頃者激する所ありて、生來甚だ好まざる駁擊の文を草す。草し終りて靜に內省するに、人を難ずるの筆は、同じく己を難ぜんとするに似たり。是非曲直輕々しく判じ難し。如かず、修練鍛磨して、妄に他人の非を測らざることをつとめんに。

（透谷全集）

二　社會と感激

中澤臨川

中澤臨川　名は重雄。工學士。文學者。長野縣の人。大正九年歿、年四十三。

一日一刻感激がなければ、その社會は遲滯する。感激のない社會は、丁度水の死んだ沼のやうなもので、孑孑のわき、枯葉の腐るに任せるほかはない。生命の源から湧き出す活泉の斷えた社會程、慘めなものはなからう。「いつそのこと太く短くこの世を送りたい。」といふやうな嘆きは、感激のない社會に生存する者の、自然に洩す倦怠の聲である。社會は一種の大きな自動機械で、誰をでもその因習と機械律のもとに囚へ搬ばうとする。多くの人は、この社會の壓制に馴れて、無自覺に、一瞬の自由をも知らずに、「自我」の面影を見る機會もなくて醉生夢死する。一人感激を欲し自由を希ふ者があつても、その人の力の餘程偉大でない限りは、彼も亦終には、重い軛を身に負はされて、同一の運命に終らざるを得ない。人

アレキサンダー＝セヴエラス　ローマ皇帝マルクス＝アウレリウスのこと（西紀二〇五―二三五）。

は生命の感激に生き、人は社會の因習に死ぬ。

感激に生きる者の一刻は、いかなる富貴を以てしても代へ得ない程貴いものである。藝術家や宗教家の生活が、能く之を證明してゐる。陋巷に窮死する名匠の一生を憐む者は、憐む者が愚である。人は、世間並に立派だと思はれる生活をして、他も羨み、自分も滿足してゐながら、ある動機から、急に從前の生活が虛僞の塊であつたことに氣の附くことがある。昔、アレキサンダー＝セヴエラスの時代に、羅馬に一人の男があつた。彼は怜悧な工匠であつた爲に、その名譽は揚り、その財囊は常に滿ちてゐた。彼は樂しい家庭に住ひ、愉快な交際社會へも出入した。彼は、日毎滿足の朝に目覺めては樂しく忙しい仕事を迎へた。これ程安泰な生活が、またと世にあらうか。然るに一日、或不安が彼の心を襲うた。彼は急に宗教上の狂熱に捉へられた。生命の嵐が、落着き拂つた羅馬の街

街を吹き捲つて、その姿を一變させたやうに彼には思はれた。古い帝王の都は、その一つの塵の位置をだに變へないのであつて、變つたのは唯、一住民の心であつた。その日から、彼の眼に映るあらゆる事物が、新しい意味を彼に齎して、彼自身が奇蹟と法悦の中心であるかに見えた。彼は、長く囚はれてゐた皮相な社會的生活の滿足から遁れて、斷えざる感激の新生命に入つたのであつた。

誰が彼を羨んだであらう。恐らく當時の人は、その後の彼の行狀を笑つたに違ひない。それほど社會的慣習と惰性とは、世間の人の心に喰ひ入つて、彼等の感覺を鈍らせ、彼等の魂に目隱しを施してゐるのである。然し、その癖彼等は、無意識の間に何等かの感激を待ち焦れてゐる。彼等は、且疑ひ且恐れながら、生命の慈雨を望んでゐる。社會的因襲の牢獄は、長く彼等の耐へ得る所でない。そこで、或者は感激の惠みを宗教に求め、或者はこれを藝術に求め、

撞着

或者はこれを直接行動に求めようとする。求めて得ざる者の墮落は悲慘であつて、これ實に社會の日々行ひつゝある罪惡である。

生命の源に遡り、感激の泉を汲まうとするのは、人性の常である。然るに、社會が之を阻止する。社會は、廣い生命の爲の方便でなければならないにも拘らず、生命の直接要求と社會との間には、常に何等かの間隙があり撞着がある。感激を阻止する社會は最も惡い社會であり、共同的感激のない社會ほど住むに値しない社會はない。私は安惰な生活の百年よりも、むしろ感激の生活の一日の貴さを想見せざるを得ない。私は、我が邦の維新前後に遭遇した人達の幸福を常に羨むものである。我等の自由性は必ずしも身體・財産の安全を以て滿足し得られるものではない。我等は、高潮した感激に由つてのみ求め得らるゝ眞自我の自由を欲する。重ねて言ふ、感激のない社會ほど惡い社會はない。

（破壞と建設）

三　世界の四聖

高山樗牛

高山樗牛　名は林次郎。文學博士。文藝批評家。山形縣の人。明治三十五年歿、年三十二。

一

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば、誰かこれを能くせんや。釋迦・孔子・ソクラテース・キリストの四人、世呼んで世界の四聖とたゝふるは宜なるかな。

釋迦は西暦紀元前凡そ五百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は摩耶夫人、その本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思ひを人生の問題に潛め、二十九の歳、その妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隱れて、道を修むること六年、遂に人生の奥義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して敎化を布き、年八十餘歳にして

伽毘羅國

跋提河の邊に歿しぬ。今の佛敎は卽ち釋迦一代の敎訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど、徒らに思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹てて相爭ふところは、畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして、歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をしてその歸依するところを知らしめたり。

釋迦

元々

木鐸

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年

大司寇　支那周代の官名。

の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學德愈〻進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、内外その風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高弟を率ゐて、四方の遊説を試みぬ。

孔子

當時の支那はいはゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にしてその君を弑する者あり、或は子にしてその親を害する者あり。强は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に

陵夷

狂瀾を既倒に廻らす

何ぞ夫子を知るもの云々　論語、憲問第十四にある。

道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子すでに志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じていはく、「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知るものなきか。」と。門弟子貢慰めていはく、「何ぞ夫子を知るものなからんや。」孔子答へていはく、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と。後幾ばくもなくして歿す。時に七十三。

ソクラテースはギリシヤのアゼンス府に住める一彫刻師の子

跋扈

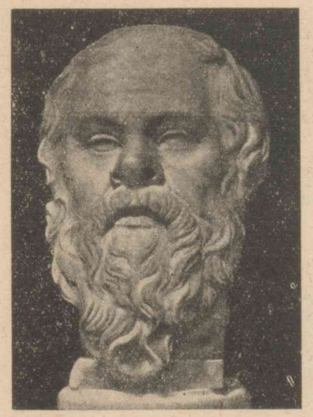
倔諤の正義

なり。その生れたるはおよそ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦・孔子と年をへだつること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。ギリシヤの當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭ひに止り、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。その狀なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して、殆ど裨益するところなかりき。ソクラテースは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻擊して一歩も假借せず。倔諤の正義その稀代の雄辯と相伴ひて一世を風靡せり。

然るに、「喬木は風に折らる。」といふ喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの、相計りて國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀にいはく、「ソクラテースは國敎を信

傲慢不遜

ぜずして異敎を粗め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテースがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官はソクラテースを以て傲慢不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、いはく、「命のみ。」と。

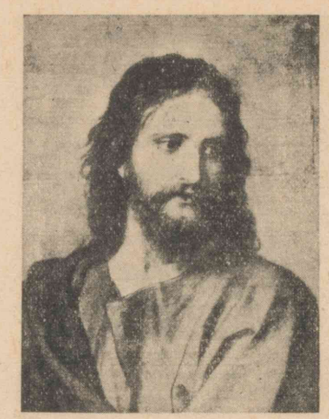


ソクラテース

ソクラテースの獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死靈魂、未來の事を說き、人の脫獄を勸むるものに對しては、輒ち答へていはく、「予はただ正義に導かれんのみ。死又何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿す。

アスクレピアスの神　ギリシヤの醫藥の神。

將に歿せんとするや、弟子、遺言を求む。ソクラテースいはく、「爾一鷄を以てアスクレピアスの神に捧げよ。」と。蓋し、嘗て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲ならん。ギリシヤの聖人ソクラテースはかくの如くにして逝きぬ。年七十。



トスリキ

キリストは本名をヤソといふ。キリストとは、「膏灌がれたる者。」といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。ユダヤのベツレヘムに生る。西暦紀元第一年はその生後四年目に當れり。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り爾來三年の間、ユダヤの各地を歴遊し、諸〻の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。

抑〻當時はローマ帝國の榮華、正にその極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日なし。殊にキリストの故國なるユダヤは、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇なる淫祠を崇拜して、益〻放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。こゝに於て、一世の人心は悉く偉人の現出して、この暗黑の社會を照破せんことを渇望せり。キリストこの間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳するや、遠近靡然としてこれに赴く。僧侶・學者・官吏等はこれを喜ばず、以て猥に新法異說を唱へて、民を迷はすものなりとなしキリストを捕へて磔殺の刑に處す。キリスト豫めこの事あらんを慮り、晏然として騷がず、靜に祈りていはく、「神よ、彼等を宥せ。彼等はその爲

すべきところを知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みていはく、「エルサレムの女子よ、吾が爲に哭くこと勿れ。たゞ己と己の子との爲に哭け。」と、かくの如くしてキリストは三十三年の短命を以て十字架上の露と消え去りぬ。キリストの死後、その弟子は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。キリスト教卽ちこれなり。

二

以上は四聖の略傳なり。その人物・事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべきところなり。四聖の中、釋迦を除きては、いづれも轗軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテースとキリストとはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は

轗軻不遇

盜賊と並びて十字架上に磔せられたり。慘澹たりと謂ふべし。然れどもこれ等の人々の志すところは天下後世に在り、現世の禍福と一身の安危とは、毫もその顧慮するところにあらず。故にその死に就くや、晏如としてなほ歸するが如し。孔子はその一身の不幸を憂へずして、却つて、「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と、嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に、その妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言していはく、「正義を信ずるものにとりて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、その一日卽ち國民の迷ひをさまさざるべからず。」と。キリストは己を罪に陷るゝものの爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖はその生れたる所と時とを異にす。故にその教理にも亦多少の差違なきを得ず。今その要略を擧ぐれば左の如し。

涅槃

身すでに修らば云々　大學に述べてゐる辭。

釋迦の教理は煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始まりて苦に終る。生老病死いづれか苦に非ざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾に在り、情慾の原因は、「我」の一念に執着するに在り。故に吾人は、「我」の一念を脱却して、無我・無心の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃卽ちこれなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平らかにするに在り。而して身を修むる基は孝に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信皆これに本づく。人は生れながらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて、これを完うすること能はざるもの多し。教育の要、こゝに於てかあり。すでに教育を受けて、身すでに修らば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治るべく、國治らば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は、一身の修養に始まり、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテースの教はいはゆる知德合一說なり。思へらく、「眞正の知識は卽ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、ともに知識・道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となさば、正義おのづからその中に在り。正義は靈魂の滿足なり。而して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴の爲に存せず。然れども、富貴は道德の中に在り。」と。

キリストの教は愛の教なりと稱せらる。いはゆる山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。いはく、「心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。

悲しむものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ渇く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、その人は神を見るべければなり。惡に敵することなかれ。人若し汝の右の頰を打たば、左の頰をもめぐらしてこれに向けよ。汝の隣人を慈みて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義をその前に行ふこと勿れ。右の手の爲すところを左の手に知らしむること勿れ。僞善者の行に倣ふこと勿れ。隱れたるを鑑み給ふ神は、顯はに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木（うつばり）を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ然らば遇はん。叩け然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門はその路大きく、これに入るものは多し。嗚呼いかに生命に至る門は窄く、その路はほそく、これをうるものの少きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふものは、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども、行はざるものは、沙上に屋を架せる愚人の如し」と。キリスト教の精髓は、後世の人いかなる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。

かくの如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いてすでに幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凜々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠の救濟者なりと謂ふべし。その遺德の高大なること何を以てかこれに比せんや。

（樗牛全集）

二三　心と言葉

和辻哲郎

和辻哲郎　文學博士。哲學者。東京帝國大學教授。兵庫縣の人。明治二十二年生。

心と心とを觸れあはせるには、言葉だけに賴ることは出來ぬ。言葉は不完全なものである。二つの心の緊張が高まつて、その間にそこばくの隔りが感ぜられるやうな場合には、特にこの不完全が目立つて來る。思ふことを單純に現したつもりでも、相手がまるで異つた方向に刺戟を受けることは珍しくない。觸れ合はうとする心は、いつまでも言葉の奧にちゞこまつてゐて、中心を離れた問題の上に、いらだたしい神經と我執とを衝突させるのである。興奮の度が强まれば强まるほど、言葉の不完全が產みだすこの葛藤は烈しくなるやうに思はれる。

しかし、この不完全な言葉を使つても、心が何のこだはりもなくすなほに向うへ通ずることもある。時には、その言葉の必要さへ

ない。それが、言葉の上の詳しい說明や了解を必要とするはずの場合においてもさうなのである。

だから、言葉によつて心を通ずることは出來ぬといひきるわけにはゆかない。しかしまた、言葉で說明しさへすれば、心は通ずるものだといひきることも出來ぬ。

心が通ずるのは、心の論理がとほつてゐるからである。頭の論理がいかに正確に言葉の內に現れてゐても、心の論理がとほつてゐなければ、人の心を承服させるわけにはゆかない。

例へば、或人の行爲に對して、非難の心持を經驗するとする。その行爲の正しくないことを指摘して、それを改めさせるのは確にいゝことである。しかし、その行爲の正しくない所以をいかに明白に說明して聞かせても、それが頭の論理で押しつめられてゆく間は、相手は決して承服するものでない。こちらの立場から相手

の行爲を不正と判斷しても、相手は相手の立場で何かしら辯解をもつてゐる。その辯解を悉く說き破つたところで、相手の心は反撥の力を强めるばかりである。純粹に理論の問題を討議するやうなぐあひには決してゆくものではない。

それは人間の行爲が、その人の性格や氣質に根ざしてゐるからである。當人にも、頭の論理だけで、自分の行爲を支配することは出來ない。彼が道德的反省によつて、自分の行爲を制御しようとする場合には、著しく自分の心の論理に賴つてゐる。それゆゑに、他から頭の論理で押詰められても、それによつて行爲を改める情熱が湧いて來るはずはないのである。むしろ、彼の性格や氣質に對して十分同感してくれない相手の心情や、論理的に自分の立場を覆さうとする相手の征服慾などが、問題の焦點たる不正の指摘よりも、遙に强い刺戟を彼に與へるのである。

たとひ、忠告者の心に正義に對する情熱が燃えてゐるとしても、またその忠告が非常に正しいことであるとしても、相手がその忠告のうちに同情を感ぜずして、たゞ征服慾を感ずるのみであるならば、忠告者の心は、終に相手の心に觸れることが出來ないであらう。忠告者が相手をよくしようとしてゐる親切な心も、かういふ場合には現れる場所がない。いかに言葉でそれを說明しても、相手の心には響かない。言葉は畢竟空である。

或心の狀態を現す言葉は、複雜な組織を土臺として現れて來る。だから同一の言葉も、それを使ふ人の人格の異るに隨つて、それぞれに異つた色調や倍音を伴ふ。言葉を通して、その背にある人格がにじみ出し、ひゞき出すのである。

心を現す言葉の妙味はこゝにある。それは、單なる知識の集積によつては、些もふかめられるものでない。たゞ正直に、その人の

築き上げた生活を暴露する。何の假託も、虚飾をも許さない。同じ言葉を使つて同じやうな心生活を表現しようとするのは、各人の自由であるが、それによつて眞實に表現せられる心生活は、言葉が同一であるやうに輒(たやす)くは同一であることが出來ない。その人が獲得した生活の高さは、いかなる場合にも、その人の言葉の內容に、或限界を與へる。キリストと同じ眞理を語ること、もしくはそれ以上に深い眞理を語ることは、二十世紀の今日では極めて容易であると考へてゐる人が、我々の眼前にいかに多いことであらう。しかしまだ何人も、キリストの如き力と愛とをその言葉からひゞき出させたものはない。貴いのは言葉でなくて、言葉の奥にひそむ心である。

（偶像再興）

鹿子木員信
文學博士。哲學者。熊本縣の人。明治十七年生。

二四　將來の日本

鹿子木員信

恐らくは日本國ほど將來の偉大を約束された國は、他に多くはあるまい。蓋し、今日の日本は、もはや單なる島國、純粹なる海國ではない。そは、その版圖たる朝鮮とその租借地たる關東州とによつて、大陸的國家となつたからである。しかも我等の活躍の奥に擴がるその大陸は、世界最大の歐亞大陸だ。そは亞細亞大陸ばかりではない。實にシベリヤを經て歐羅巴大陸に續く大陸である。鐵路フランスのパリーよりバイカル湖畔に至るまで、殆どトンネル一つなき連續せる平野である。ウラルの山脈は、唯少しく持上つた丘陵に過ぎない。バイカル湖畔に至つて、始めてその岬角を迂曲するために、僅ばかりのトンネルを潛るのみだ。而してバイカル湖を後ろにし、興安嶺の低い、なだらかな丘陵を過ぐれば、再び

朝鮮國境近くまで打續く平々坦々の滿洲の沃野千里である。

この世界最大の大陸である歐亞大陸に連る、日本帝國の中央部であり、又その核心である日本諸島の面するところは、實に世界に於ける最大の海洋である太平洋だ。而して太平洋の彼岸は、卽ち南北アメリカ大陸だ。換言すれば、日本帝國は、實に以て一般に國民を偉大ならしむる要素、ラッチェルの所謂國民偉大の源泉である海洋、しかも日本の場合においては、世界最大の海洋に浴し、この海より得る寶を以て、泰山の安きに置き得る大陸を有してゐるのである。かくの如き偉大たり得

ラッチェル
獨逸の地理學者（西紀一八四四—一九〇四）。

べきすべての要件を具へて、しかも、尙將來日本國に何等見るべき偉業と、雄渾なる文化とがなしとするならば、そは日本國土の罪でなく、無論、日本國土を我等に賜うた神々の責任でもなく、明らかに我が日本國民の惰弱・低能のしからしむるところでなければならぬ。

若し、世界において、日本國以外に、日本とほゞ同樣の形勝の地位を占むる國ありとすれば、そは英國であらう。しかもその英國は、昔よりその對岸に、スペイン・フランス・ベルギー・オランダ・ドイツ・デンマーク等、その人口において、その富と文化の程度とにおいて、何

拮抗

冱寒

れも英國と雁行し拮抗するところの强國・文化國を控へてゐたのである。然るに我等の日本國の場合においては、西北に向つては、殆ど無人といつて好いシベリヤの曠野が、無限に開けてゐるのである。我は人口の過剩に惱んでゐるのに、彼は人口の稀薄に苦しんでゐるのだ。しかもその地は、たゞ嚴冬の冱寒といふ一點を除いては、極めて良き健康地帶であり、その地上・地下は、未だ開發されざる無限の資源を藏してゐるのである。而して我が二千年來の隣邦支那の現狀は、國內の紛爭に寧日なく、何時その秩序・統制を恢復し得べしとも見えぬ。退いて深くこれ等の事實を綜合し、玩味して見よ。鋭き靈覺ある者は、日本國將來の雄渾なる可能性が、彷彿としてその心眼の前に湧き立ち來るのを禁じ得ないであらう。

然るに、飜つて思ふに、世界史上における日本の可能性は、これ取りも直さず、我等日本國民に課せられたる天與の課題、實に我等當

退嬰自屈

苟安

空疎

面の天與の事業に外ならぬ。從つて、進んでこの天與の課題の解決に努めんとせず、却つて躊躇逡巡・退嬰自屈、たゞ目前の苟安を求むるにのみ汲々たることは、日本國民自らその日本國民たるの意義と使命とを拋棄し、自らをやがては來る亡滅の手にゆだぬることである。然らば生き且勝たんがためには、我等は何を爲すべきか。我等の仕事は、その事業の大であればあるほど、多岐多樣萬端であることはいふまでもない。たゞ若し、この際我等の心構への根本的なるべきものを取出して語るを許さるゝならば、そは恐らくは次の如くであらう。

精神的には、我等は先づ、空疎・皮相淺薄なる歐米追隨の風を止めねばならぬ。寧ろ去つて、深く日本精神の歷史的經驗に沈潛し、そこに我等の心を、我等自らの過ぎし勝れし文化によつて培ひはぐくみ、養ひ育てて、具體的に、卽ち眞實に世界文化なるものに眼ざめ

なければならぬ。

一度、我等の心にして、日本文化に培はれて、世界文化なるものに參到する時、我等の心は、もはや世界文化を自覺せる心である。而して一度眞に世界文化を自覺せる心を以て、西歐の文化に對する時、西歐の文化は、今までとは全然異つた深き內容を持つ崇高なる姿となつて、我等の前に現れ來るであらう。その時西歐の文化は、もはや單なる機械的物質的文明ではなく、その機械的なるものさへも、實は、ある獨特な深遠な心構への生むところであることを知るであらう。而してこの時始めて、實はこの「西洋機械之術」をも「盡す」ことが出來るのである。

小楠流に、單に「堯・舜・孔子之道」を「明らかに」してゐただけでは、百年の學習もなほよく機械之術を盡すことを得ないで、常に西洋の足跡を追ふのみでなく、遂にはその後塵を拜するに終始するであらうと思はれる。西歐の文化を物心兩面に亙つて把握し得る者は、たゞ全體としての文化に沈潛參到する者のみである。而して、歐米文化との接觸交涉の今日の如く盛んなる日本にあつて、進むべき道は唯一つ——徹底的に而して全體として、西歐の文化を了得するにある。この了得の上に、彼我文化のより高き綜合に向つて精進することにある。

而して經濟的政治的には、前に指摘した如き當面の事實の大膽なる直視と、その事實を生む課題に對しての勇敢なる解決の努力こそ、我等の指針たるべきものである。年々五十萬乃至七十萬の人口增加は、退嬰無爲を事とする人々に取つては、或は極めて厄介なる事實であるかも知れぬ。しかも、我等は、この事實より面を背くべきでない。寧ろ生存の必要に直面して、內には國民的生活樣式を改善することによつて、これを單純簡易堅固なるものたらし

小楠　本名は横井時存。小楠はその號。熊本縣の人。維新の功臣。明治二年歿、年六十。

後塵を拜す

め、外には國家發展の鐵則を明視して、その認識の上に、適確なる事實に基づき、細心大膽なる國策を樹立すべきである。今日世に行はるゝ思想は、我等の見るところを以てすれば、悉く一日の苟安を貪るなまけ者の欲求か、然らざれば、たゞ空しき俗論・時流に投じて、事實客觀の問題のいづこに存するかを知らぬ空疎なる事大主義者の空論としか見えぬ。我等は一日も早く、この風潮を一掃して、再び我が日本國をして認識適確、勤勞健闘の國家たらしめねばならぬ。

（「やまとごころと獨逸精神」―大正十五年作）

時代の概觀

二五　近世・明治の文學

一　近　世

上古の和歌に發して中古の物語となり、近古の軍記物語となり、更に謠曲となれるは、上古より近古までの國文學變遷の大綱にして、抒情詩より敍事詩、敍事詩より劇詩となれる順路を經過し來れり。但し之を繼承し、之を完成して、あらゆる方面の發達・進歩を示したるものは卽ち近世文學に在り。德川の昌平三百年は、文學の發達・進歩には最も幸運なる時代なりき。

中古の國文學は宮媛より出で、近古の國文學は公家と僧徒との手に成れり。近世に入りては、學問は次第に僧徒の手を離れ、別に儒者の一階級を生じ、又儒學者に對して起れる國學者あり。孰れも地下人にして堂上人に非ず。文學草莽に墜ちて、自由研究盛ん

儒學の奬勵

に、近古時代の弊竇たりし祕事・祕傳を貴ぶ風は次第に解除せられ、官職・家格にこそ上下の階級は嚴重なれ、學問の門戸は何人にも開放せられ、知識の堂奥は何人の登昇をも拒まざるに至れり。茲に於て爭うて新說を鼓吹し、强ちに師說に泥まず、獨斷的方法を棄て、學術的研究の態度を取るに至りしかば、一般學術の進步大いに見るべきものあり。純文學も亦之に伴ひて其の發達をなせり。印刷術の進步が、其の背後の大勢力たりしは言を待たず。

德川幕府は儒敎を奬勵して武士の修養に資し、經・史に通ずるものを爲政家として登庸せり。是に於て文敎大いに興り、碩學・鴻儒相踵いで世に出でたり。是等儒學者の假名を交へて筆述せる所謂和漢混淆文は、卽ち法を漢文に採り、漢語及び漢文訓讀の法を國文に加入せるものにして、卽ち今の普通文の基礎を成せり。貝原益軒・新井白石・荻生徂徠・室鳩巢等、或は隨筆に或は論說に、若しくは

國學の興起

紀行に若しくは傳記に記す所同じからず、文體一樣ならざれども、平易暢達、概ね近體文の模範となすに足る。

漢學者が、支那の古文明に憧憬するに慊焉たらず、日本自ら日本の道ありと稱して、學問・文章に日本の長所を發揮せんとしたるものは國學者なり。漢學者が漢文を作爲せるが如く、國學者は、中古以上の純國語を以て文を綴り、歌を賦し、只管我が國の古代を理想とす。賀茂眞淵・本居宣長・村田春海・橘千蔭等、苟も古學派の流れを酌めるものにして、國學者を以て自ら任ぜるものは、法制・制度の專門家たると、言語・文法の學者たるとを論ぜず、必ず雅文を作り和歌を賦し得ざるものなし。國學者はかくして漢學者の漢文・漢詩に對抗したれども、其の擬古文と稱するもの、句章の排列・引喩の方法等、實は知らず識らず當時の漢文に負ふ所尠からず。

和歌の革新

和歌に於ても、亦德川時代に於ては一革新を見るを得たり。い

はれなき祕事・祕傳の束縛は、早くも地下國學者の嘲笑する所となり、學術的論斷の前には論抗する能はず。地下の國學者は何等の掣肘を受けず、束縛を蒙らずして、自由に詠歌をすさびとせり。其の初は堂上家に學びし京都の地下人中にも、後には出藍の才を發揮して、優に堂上家を凌ぐものあり。世下るに隨ひて、作家益〻多く、私集續出せり。之を近古以來の沈滯眠れるが如きに比すれば、其の懸隔如何ぞや。

雅文・和歌の進歩は、近世文學史上の一大偉觀たるを失はざれども、要するに模倣文學なり、復古文學なり。學問興隆の結果として學者の間に起れる文學にして、一般庶民の文學に非ず。堂上の文學は地下に委し、僧侶の學問は俗人に移りたれども、文教は尚士流以上に限られたり。然るに都市の發達、財貨の增殖に伴ひ、平民社會の勃興は隱然として其の勢力を成し、文藝の方面に於ても、活躍

平民文學

俳句

せる發達を認むるに至れり。彼の近古文學を繼承して更に之を大成せる新文學は、皆此の平民社會の勃興を表彰するものならざるはなし。俳句・川柳・狂歌・狂文より小說・淨瑠璃・脚本の類、もとより教育少く趣味低き社會の嗜好に投ずるものとして、間〻猥雜鄙陋なるもの無きに非ざれども、文學としての生命は其の中に活動せり。

十七字の俳句は、詩形としては世界の文學中恐らくは最も短簡なるものなるべし。然れども其の詩界は和歌よりも甚だ廣大なりといふを得べし。何となれば、和歌の用語は已に古語に限られたるに、吟詠の範圍亦春花秋月、古人の題詠以上に出づる能はざれども、俳句の用語は漢語と俗語とを選ばず、古語と今語とを問はず、要は之を詩化して用ふれば可なり。又其の吟詠する主題も、必ずしも古の大宮人の見そなはしけん物には限らず、如何なる市井裏店の事物をも捕捉し來るを厭はざればなり。唯其の句形の短き、

物の急所を捕へざるべからず、象徴を示さざるべからず、不言にして語り、言外に餘韻無からしめざるべからず。修辭上より見んか、冗長優美に流れ易き國語をして、出來るだけ緊縮せしめたるものにして、連歌以來幾數回の陶冶を經て洗煉せられたる句法の茲に到達せるものにして、技巧の最も進歩せるものなりといはざるべからず。然れども其の最短簡の極なる言語を以てして、多大の意味を髣髴たらしむるを得るは、和歌の約束を利用したるが爲に外ならず。古來の和歌の約束は物語となり、謠曲となり、常に吾人に親しめり。其の一語は早く吾等に向つて詩的の感を與ふ。俳句は之を利用して其の句の效果を成すことを得るなり。俳句には必ず季無かるべからず。季に於て人事と自然とを結合す。上古以來の和歌は自然と人事との融合を忘れず。其の約束は十七字の中に緊縮せられて、吾人はこゝに其の結晶物を見るに至れるな

俳文

狂文

り。

俳人の吟詠するに方りて材料とする人事自然古今雅俗の別なく、縱横に其の感懷を排列して文を成せるものは卽ち俳文なり。枕草子を中古歌人の主觀に映じたる隨筆文とすれば、俳文は俳人としての主觀に映じたる一切を隨筆して其の興を遣れるものといはんか。古人が一の句題を得て數百句を得るとせんに、そは皆記憶を本とし、經驗を本とし、想像再現の作用によるものとせば、此の想像再現作用の箇々分立せるものは俳句を成し、同時に聯結せるものは俳文を成すといふべし。

狂文は俳文に似て非なり。俳家者流は雅俗を別たず、階級を無視して、自ら世外に超然たる風あるを以て、一種飄逸の氣風あり。狂文の取材の古今に亙り、雅俗に跨るは似たれども、尙稍〻世俗に落ちたる觀あり。恰も其の名の如く、普通文の常規を脫し、卑俗を厭

狂歌

はずして、古文に言ひ得べからざる思想を古文の形によりて言ひ現したるものなり。大體に於て古文のモヂリといふべきものなり。故に滑稽可笑を主として、超然洒脫の趣なし。其の發達の俳文に負ふ所多かりしも疑ふべからず。

狂歌も亦和歌の流行と共に行はれたり。古歌の用語・句法を用ひて、世俗の事柄を吟詠する上に其の滑稽を構成するなり。莊重なるべきものの卑俗化せられ、眞率なるべきものの戲笑の資に供せらるゝがをかしきなり。狂歌の趣味は、和歌ありて始めて存するなり。

前句附と稱して、かねて下の十四字を定め置きて、之に相應する上句十七字を作らしむるは、一種狂歌の戲なり。其の前句は遂に獨立して川柳となれり。文雅風流の士の間に行はれずして、市井間の遊戲に出で、ひたすら機智頓才を競ひたるものなりき。故に

川柳

自然の景色を詠出することなくして、日常社會の人事を材料とし、其の形の短簡なるは最も譏刺に適せるを以て、遂に專ら世俗人情の弱點を譏笑するを目的とするに至れり。川柳點の穿ち卽ち是なり。俳句も亦間〻滑稽洒脫のものあれども、俳句は必ず自然を伴はざるべからず。川柳は自然景の聯合を要せず、鋭敏なる觀察、機警なる單語、寸鐵人を殺すの概あり。江戸っ子の機敏頓智と樂天洒落の性質とを反映せるものといふべし。凡そ狂歌といひ、狂文といひ、川柳といふ、皆江戸の地に發生せるものにして、以て昌平日久しき逸民のすさびを見るべきなり。

敍事詩の方面に於ては、初期に於て早く信長記・太閤記等の軍書出でしが、後假名草子と稱するもの流行せり。佛教・儒教の教訓を含むこと多きは、近古時代の文學と相遠からず。文辭・脚色尙新奇と稱すべきもの無かりしかども、中には支那の怪談・傳說等を飜譯

し來れるあり。小說界一般を貫通せる教訓主義と、支那小說の飜案主義とは、早く其の傾向を認め得べきものあり。碩儒多く輩出し、一般文藝の勃興せる元祿時代は、小說界に於ても西鶴を出せり。西鶴はもと俳人にして、輕妙洒落なる筆致と鋭敏犀利なる觀察とを以て、次第に淫靡に流れたる社會の半面を寫し、文辭着想共に一機軸を出せり。西鶴の作は寧ろ人生の隱微なる裏面を忌憚なく暴露したるものにして、道義のやかましき時世に、淫猥なる言辭を敢てして毫も遠慮せざるは、俳人の不羈洒落なる襟懷を見るべしといへども、要するに淫靡の語を列ねて淫靡の俗に投じ、讀者の心を挑發して其の書を沽らんとしたるに過ぎず。唯其の文辭の妙に至りては、中古文の典型に據らず、近古文の常套に陷らず、推敲精錬の造句に習熟せし俳人の、其の才を社會描寫の敍事文に應用せるを見る。故に其の小說も、亦全篇を通じて脚色ある小說に非ず

して、幾多片々たる小話の集合に過ぎず。若し此の一小話を一句と見れば、全篇は卽ち連歌の如し。西鶴の連句を見れば人事を詠出せるもの多く、其の小說は其の連句を擴張せしに外ならざるを知る。西鶴の流れを酌めるものに、自笑・其磧の書ける八文字舍本あり。世西鶴の書と併せて浮世草子といふ。是等は皆京阪地方に發生せる文學とす。

赤本といひ、黑本といひ、靑本といひ、黃表紙の類、片々たる遊戯文學は未だ平民文學の誇となすに足らず。洒落本の描寫精細に進めるも、不健全なる社會の一面を反映せるものにして、不健全なる作物たるに過ぎず。戯作の文字の遂に戯作に過ぎざるは、遺憾の事といふべし。

國學者中、古文を用ひて小說を作れるものあり。然れども高尙にして一般人の嗜好に遠し。支那文學を飜案することの行はれ

たるも、亦漢學隆盛の賜なり。一般學問の發達は、小說を稍〻向上せしむるに至りて、勸善・懲惡を寓して歷史小說を作るに至れり。之が代表者として作物の最も多く、亦傑作多きは曲亭馬琴なり。馬琴は漢學の素養少からず、國學にも造詣あり。其の學識を以て戲作の業を事とし、支那文學を飜案し、常に武士の典型を作物の主人公とせり。健全なる小說として當時に歡迎せられ、今も尙其の讀者を失はざるも故なきに非ず。

三馬・一九の輩の、對話を主として滑稽を記し、又人情を描寫せる滑稽本あり、爲永一派の人情本あり。各特得の妙味ありて、文學として見れば論評の價値なきに非ず。是等はすべて江戸の文學とす。

小說よりも更に重大なる、否最も重要なる近世文學の產物として見るべきは、劇詩の方面に於ける發達なるべし。是亦文藝時代

淨瑠璃

として最も着目すべき元祿の世の發展を著しとす。芭蕉・西鶴に對して、近松門左衞門は劇詩に於て新生面を開ける人なり。淨瑠璃の名は近古時代に發せるものにして、近松以前已に許多の淨瑠璃あり。三味線樂の發達と共に益〻平民社會の趣味に投じ、次第に其の進步を見しが、門左衞門に至りて其の文辭の絢爛なると、其の脚色の新奇なるとに於て、自ら新文學を作り得たりしなり。淨瑠璃は蓋し謠曲の平民化せるものといふべく、平語以來源平時代の事蹟は謠曲となりて普及せしが、謠曲の文や平民社會の耳に遠く、其の趣向もあまりに單純に過ぎたり。淨瑠璃は更に其の結構を複雜にし新奇にし、既有の事實を種々の形式に變化せしめて詩人的技巧を施し、以て庶民の嗜好に投ぜしめたるものなり。故に近松の歷史劇に於ては、其の歷史的人物は悉く德川時代の人物と化し去り、又其の古英雄たる風貌を棄てて、平民社會の行動に近づけ

るものあり。茲に於て純史劇と稱すべからざるものあり。又其の地の文を有して、劇中の人物の性格行動によりて、事件の進行發展を促すこと無きが故に、未だ純劇詩と稱すべからずして、尙敍事詩の性質を脫せざるもの多し。

近松は晩年に至りて、多くの世話淨瑠璃を作れり。市井間に行はれし事件を以て義理と人情との衝突を寫し、匹夫・匹婦を詩化して讀者の同情を惹き起さしむ。西洋の悲劇詩と其の歸趣を同じうするを見る。其の文章は近古文の系統を受けて、修飾遊戯に過ぎたれども、しかも卑語を厭はず、俗諺を棄てず、形式こそ古けれ、用語は新奇にして輕妙巧緻を極めたり。然れども近松が文章の價値は、之よりも尙能く作中の人物の言語行動を寫して、其の人物の風采を想望せしめ得るに在り。是れ近古文學に見る能はざる所なりとす。紀海音も豐竹座の爲に執筆して、竹本座と相對立せり。

竹本座の作者としては、初に近松、其の死後、竹田出雲・近松半二の徒あり。學識・文章もとより門左衞門の比に非ざれども、工夫合作して舞臺の上の效果を目的としたるもの多し。其の後歌舞伎に歡迎せられたるは、是等諸人の作に多し。いづれも人情を棄てて公道に就くの犧牲的精神を主眼とす。所謂義太夫節に演劇に、國民を感化せる力甚だ大なりしなり。

二　明　治

明治の文學は、新聞紙上の所謂續き物と稱する小說に其の萌芽を發す。從來筆を政治論にのみ執りたる人々も、此の種の文藝の人心に影響することの速なるを認めて、或は英・佛の政治小說を飜譯し、或は新たに脚色を立てて、自家の主張を具體的に說明せんことを企てたり。佳人之奇遇・雪中梅・經國美談等は、當時最も喧傳せ

られたるものなるが、未だ人情の機微に入らず、眞に文學の眞諦を得たるものといふに足らざりき。然るに坪內逍遙の新文學論を唱ふるに及び、硯友社一派の新たに旗幟を樹つるあり。在來の、戲作者系の人々も此に呼應して立ち、新文藝は蔚然として興りぬ。

蓋し、維新以來萌し來れる歐化主義は其の極に達し、其の反動として國粹保存論は盛んに唱道せらるゝに至り、國語教育の奬勵、古文學の研究が隆昌を極むるに至りては、新文藝の先達も啻に西洋の文學のみならず、我が國の古文學を顧みるに至れり。我が文壇の泰斗として、新篇出づる每に、洛陽の紙價を貴からしめたる尾崎紅葉と幸田露伴とは、ともに西鶴を學びて、其の新文體を創めしものなりき。

紅葉が艶麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が遒勁の調は巧に男兒の意氣を描きぬ。されど其の題材は稍〻單調なりき。稍〻

小說

久しうして世間は其の反復に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵小說冒險小說俠客小說等の複雜なる脚色に喝采し、或は慘澹たる事件を敍したる所謂觀念小說、悲痛なる苦悶を抒べたる心理小說を歡迎し、或は光明小說家庭小說等と、幾度か流行は變遷しつゝ、日淸日露の大戰を終りぬ。

戰勝に醉ひし豪奢の餘弊と、避け難き財政上の壓迫とは、我が國民が生活難の聲として青年の耳朶に響きぬ。かくて從來の文藝批評家は、漸く人生の研究に轉進し來れり。或は高山樗牛の美的生活論となり、或は綱島梁川の見神說となり、或は自然主義といひ、或は無理想無解決と呼ぶものあり。人生の暗黑面を誇張したる所謂自然派の小說は、此の間に出でぬ。而して此の混沌たる思想界を出でて、更に高く更に深き人生の眞意義を捉へんとして、倫理に、哲學に、宗教に、文藝に、秩序ある討究を重ぬるに至れり。

和歌

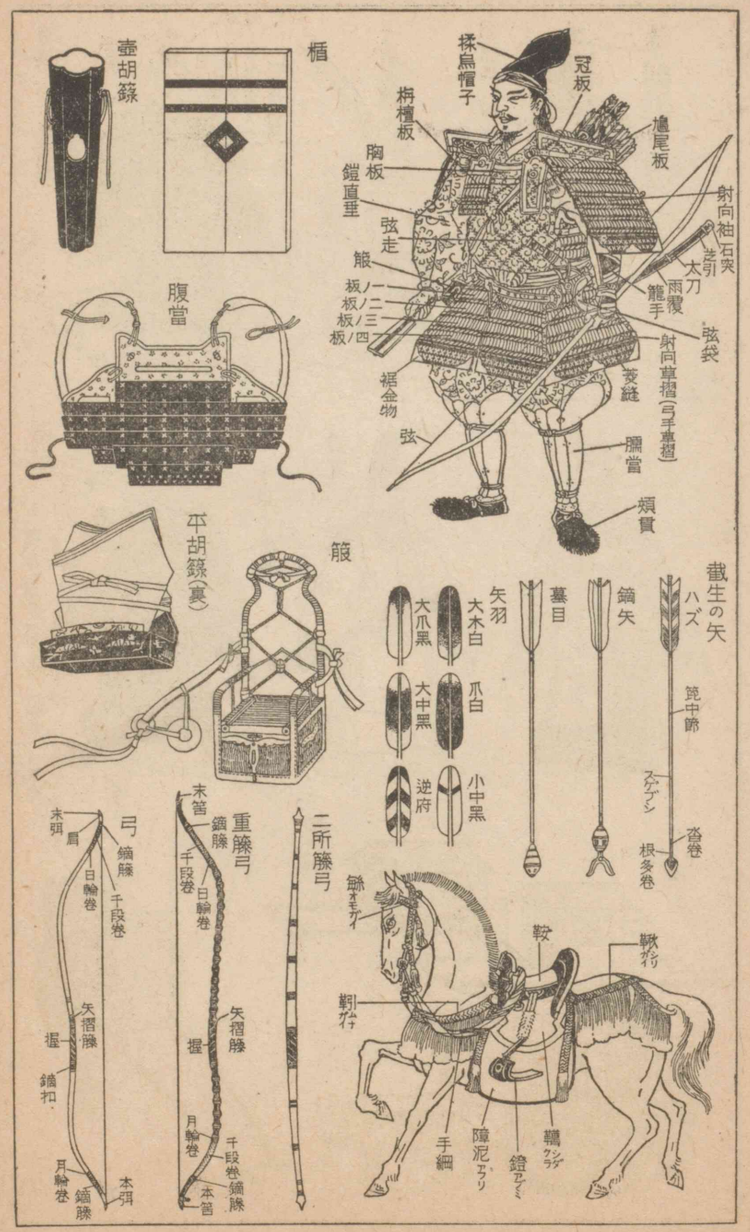
歌道には桂園の流れを汲むもの多かりしが、落合直文出づるに及びて、風雅を生命とせる月花の天地より、活社會の人生を歌はんとする傾向を生ぜり。俳道には正岡子規出づるありて、天保の俗調を排して清新なる天明調を復活せしめ、更に進みて淡々たる寫實の妙趣を鼓吹し、啻に俳句のみならず、寫生文と稱する小品文の流行をも促しぬ。此の派より出でて筆を小說につけたるものに、夏目漱石あり。

新體詩

此の他、明治の新文藝としては、別に新體詩あり。外山博士等が新體詩抄を以て始まる。ついで、或は中古語を以て西歐の詩趣を傳へんとするものあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らんとするものあり。中頃島崎藤村が溫雅優美の調、土井晚翠が縱橫跌宕の風、最も世に喜ばれたり。後、新詩の格調は日に新たなりと雖も、未だ雄渾偉大にして、眞に國民の詩歌と稱するに足るものなし。

更に純文藝の範圍を出でて、專ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、さきに福澤雪池・福地櫻痴・成島柳北等の平易明快なる文字あり。降つては三宅雪嶺・德富蘇峰・坪內逍遙・森鷗外・高山樗牛・大町桂月等あり。現代の普通文は、純文藝の著作より寧ろ此等の人々の筆致に負ふ所多きに似たり。

（芳賀矢一氏の所說に據る）


壺胡籙
楯
腹當
平胡籙(裏)
箙
烏帽子
冠板
梅檀板
胸板
鎧直垂
弦走
板ノ一
板ノ二
板ノ三
板ノ四
裾金物
弦
鳥尾板
射向袖
石突
差引
太刀
雨覆
籠手
弦巻
射向草摺(弓手草摺)
菱縫
佩盾
頬貫
截生の矢
ハズ
筈中節
スカデシ
根多巻
鏑矢
墓目
矢羽
大木白
大爪黒
爪白
大中黒
小中黒
逆府
弓
末弭
扇
鏑籐
日輪巻
千段巻
矢摺籐
握
鏑扣
月輪巻
本弭
重籐弓
末笛
鏑籐
千段巻
日輪巻
矢摺籐
握
月輪巻
千段巻
鏑籐
本笛
二所籐弓
鞍
鞦
障泥
手綱
鐙
鞦

新制國語讀本

卷七

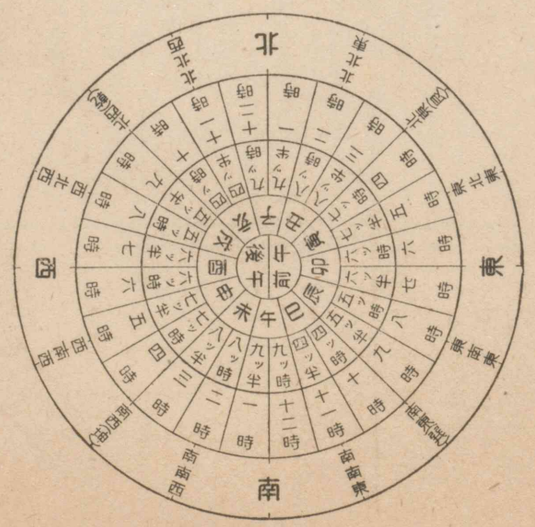
終

官職表

（大寶令を基本としたるもの）

官職／官等	神祇官	太政官	八省	武官・警察					地方官		其他
				弾正臺	左右近衛府	左右衛門府	左右兵衛府	左右馬寮	左右京職	大宰府	藏人所
長官（カミ）	伯	太政大臣・左大臣・右大臣・内大臣	卿	尹	大將	督	同	頭	大夫	帥	頭
次官（スケ）	小副	大納言・中納言・參議	大輔	小弼	小將	佐	同	助	亮	大貳・小貳	介
判官（ジョウ）	大祐	少納言・左大弁・右大弁・中納言・小弁	小丞	小忠	大將監	大尉・小尉	同	小允	進	大監・小監	大掾・小掾
主典（サクワン）	大史	大外記・小史	大錄	小疏	大將曹	大志・小志	同	小屬	屬	大典・小典	大目・小目

方位及び時の圖



紛れ易き品詞（文語）

語	用法の種別	用例
たり	時の助動詞 現在完了	花咲きたり。
	指定	父父たり、子子たり。
だに	重きを言外に含ましむる	思ふこと筆にだに殘さばや。
すら		我身すら容れられず。
さへ	添加	梓弓おして春雨けふ降りぬあすさへ降らば若菜つみてむ。
に	場所・方向	机によりかゝる。
へ		前へ進め。
ばや	願望	心あらむ人に見せばや。
なむ		世の汚をば知らであらなむ。

語	用法の種別	用例
しか	過去の助動詞	斃るゝまでこそ戰ひしか。
	過去の助動詞	君はこの本をよみしか。
ど	係結	美しけれどとげあり。
ども		見れども見えず。
ぞ		見てぞ思ふ。
や		花や散りし。
か		いづれかまされる。
なん		善くなむ見ゆる。
こそ		人こそ見えね。

語	用例
を	を川。を暗し。
初	うひ陣。うひ學び。
彌	彌高し。彌增す。
げ	にくげ。心ありげ。
めく	時めく。春めく。
ばむ	けしきばむ。汗ばむ。
さぶ	神さぶ。
ぶる	學者ぶる。
らし	男らし。女らし。
がまし	をこがまし。隔てがまし。
がてら	散歩がてら。

紛れ易き品詞（文語）

語	用法の種別	用例
たり	時の助動詞現在完了	花咲きたり。
	指定助動詞	父父たり、子子たり。
	形容動詞の語尾	水洋々たり。
なり	動詞	事業愈〻なりぬ。
	指定助動詞	彼は軍人なり。
		花の美しきなり。
		日はくるゝなり。
	詠歎の助動詞	蟲の聲すなり。
	形容動詞の語尾	山紫に水明らかなり。
	推量の助動詞	散るらむ。
らむ	時の助動詞未來完了	生けらむ。
ね	打消の助動詞	人こそ知らね。
	完了の助動詞	とく行きね。
しか	過去の助動詞と疑問の助詞	君はこの本をよみしか。
	過去の助動詞	斃るゝまでこそ戰ひしか。
ぬ	完了の助動詞	花咲きぬ。
	打消の助動詞	こぬをまつ。
なむ	未來完了の助動詞	花咲きなむ。
	願望の助動詞	花咲かなむ。
	係の助詞	花なむ咲く。
な	禁止の助詞	ゆめ忘るな。
	完了の助動詞	花散りなば。
	感動の助詞	知らじな。
	願望の助動詞	心あらむ人に見せばや。
ばや	條件と疑問の助詞	心あてに折らばや折らむ。

助詞の用法（文語）

用法の種別	助詞	用例
疑問	や	有りや無しや。
	か	有るか無きか。
反語	や	豈我のみならむや。
	か	唯か知らざらむ。
禁止	な	ゆめ忘るな。
	な…そ	我をな忘れそ。
		惡事をなせそ。
重きを言外に含ましむる	だに	思ふこと筆にだに殘さばや。
	すら	我身すら容れられず。
添加	さへ	梓弓おして春雨けふ降りぬあすさへ降らば若菜つみてむ。
場所・方向	に	机によりかゝる。
	へ	前へ進め。
願望	ばや	心あらむ人に見せばや。
	なむ	世の汚をば知らであらなむ。

用法の種別	助詞	用例
條件 假定	ば	明日晴天ならば遠足せむ。
		急かずばぬれざらまし。
	と・とも	繪にかくと筆も及ばず。
		よろづよ經とも色はかはらじ。
條件 確定	ば	問へば答へ、問はざれば答へず。
		品よければ買ひぬ。
		波風止まねば同じところにあり。
	ど・ども	美しけれどとげあり。
		見れども見えず。
係結	ぞ	見てぞ思ふ。
	や	花や散りし。
	か	いづれかまされる。
	なん	善くなむ見ゆる。
	こそ	人こそ見えね。

接語

語	用例
を	を川。を暗し。
初	うひ陣。うひ學び。
彌	彌高し。彌增す。
第	第一。第二。
た	た謀る。た走る。
け	けうとし。け壓る。
生	生紙。生藥。
もの	もの淋し。
いち	逸早し。
み	み吉野。み空。
お	お顏。
か	か弱し。か細し。
さ	さ夜。さ迷ふ。
ま	ま直中。ま心。
ひが	ひがめ。ひが事。
ほの	ほの見ゆ。ほの暗し。
ども	物ども。事ども。
ら	汝ら。我ら。
がた	君がた。殿がた。
たち	親たち。公だち。
ばら	殿ばら。奴ばら。
さま	神樣。
へ	ゆくへ。片へ。
さ	行くさ。歸るさ。
み	青み。深み。
げ	にくげ。心ありげ。
めく	時めく。春めく。
ばむ	けしきばむ。汗ばむ。
さぶ	神さぶ。
ぶる	學者ぶる。
らし	男らし。女らし。
がまし	をこがまし。隔てがまし。
がてら	散歩がてら。

昭和十二年七月廿六日印刷
昭和十二年七月廿一日發行
昭和十三年一月十日修正再版印刷
昭和十三年一月十五日修正再版發行
昭和十六年十月二十日修正三版印刷
昭和十六年十月三十日修正三版發行

新制國語讀本
定價 卷一——卷九 各六拾錢
卷十 各五拾八錢

編者 東條操

發行者 東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
代表者 山本慶治

印刷者 東京市蒲田區仲六郷一丁目五番地
株式會社 三省堂蒲田工場
代表者 岸本玄男

發行所 東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

（略名）三省東條國語（一—十）

日本出版配給株式會社 元配給
東京市神田區淡路町二ノ九

広島大学図書
2000302735
成
41
735